

山田研究



地域文化の記録

始良市山田の歴史，民俗，芸能，暮らし

始良市山田の歴史、民俗、芸能、暮らし

山田研究

地域文化の記録

始良市立山田小学校

教育は地域の実態に即して行われなければならない。そのために先ず地域の実態を知ることが必要である。山田には山田の歴史があり、地理がある。長所もあれば、短所もある。これを無視しては教育はできない。

昭和39年10月15日に山田小学校が刊行した社会科資料「やまだ」に、山田小学校長（当時）の細山田武道氏によって書かれた序文の冒頭の一文です。

それから50年が経ったわけですが、当時の山田小学校の職員が夏休みを利用し、聞き取り調査や資料の研究に邁進した汗の結晶である「やまだ」の資料的な価値は、少しも色褪せることはありません。いや、それどころか当時収集された山田校区の民俗や伝説などは、今となつては失われたものも多く、一層その貴重さを増しているのです。

当時、職員の中心となり「やまだ」の研究・執筆を担われた松永守道氏が、「さらに第二集、第三集と改訂するごとに、より立派な正しいものとなることは間違いなし。」と述べられているのですが、残念ながらこれを超えるものが、山田小学校職員によって作成されることはありませんでした。

それほど「やまだ」は優れたものであったわけですが、時を経たことによって、例えば表記・表現上変更が必要な部分が生じていました。また、当時は経費の関係で写真の掲載が見送られました。さらに、破損や紛失により山田小学校に残されていたのは1冊のみという状況がありました。

しかし、一方では郷土教材に学ぶ学習の必要性は高く、ふるさとに学ぶための学習資料を求める声は高かったのです。そこで、山田を学習するための資料として編まれたのがこの山田研究です。50年前に編まれた「やまだ」には遠く及ばないにしても、この資料をもとに山田の子どもたちがふるさと山田について学び、成長した後に郷土のために活躍してくれることがあれば、これに過ぎる幸せは無いと考えます。

山田研究 目次

刊行にあたって	2	西南戦争招魂碑	47
目次	3	西田野町	48
山田のはじまり	4	日清戦争	49
黒島神社	5	日露戦争	50
黒島神社田作りの神事	7	凱旋門	51
黒島どんと老神どん	9	興文館	52
山田城	10	弘道舎	53
梅北国兼	12	昔の医療	54
棒踊り	13	山田の病院	55
山田の郷土芸能	15	山田の昔の町	56
中津野用水路	17	山田の商工会と祇園祭	57
上名用水路	19	客馬車	59
宇都川用水路・山崎用水路	20	山田橋	60
外城制度と郷土	21	太平洋戦争と山田	61
門割制度	23	山田中学校	62
帖佐松原の鬼火	24	門松	63
蛇塚	26	鬼火焚き	65
大戸翁	27	七草雑炊	66
住吉池と浜石門	28	3月節供, 春の彼岸	67
西田の田の神	30	山田川鮎の石焼き	69
石敢當	31	お盆	70
一向宗の禁制と隠れ念仏	32	十五夜・綱引き・相撲	72
廢仏毀釈	34	山田の里かかしまつり	73
城光寺の泉水	36	田の神	74
山田と薩英戦争	38	講について	75
地租改正	40	山田の歴史年表	79
山田小学校	42	参考文献	81
西南戦争	44		
西郷隆盛の腰掛け石	46		

やまだ 山田のはじまり

今から1300年ほど前に、^{ふくおかけんしかのしま}福岡県志賀島より^{すすきさぶろうまさうじ}鈴木三郎政氏
という人が^{ちょうさ すみよし うつ す}帖佐の住吉に移り住んだそうです。そして、その^{おとうと}弟
の^{しろうまさよし やまあい とち き}四郎政良が、山間の土地を切りひらいて田や畑をつくったの
が、^{やまだ}山田のはじまりだといわれます。(山と山の^{あいだ}間にある田)
^{すすきまさよし}鈴木政良は、^{くろしまじんじゃ た あと}黒島神社を建てた後に、^{くろしまじんじゃ ちか やしき}黒島神社の近くに屋敷を
^{た す}建てて住み、その場所を^{ばしょ みやむれ な}宮牟礼と名づけました。^{くろしまじんじゃきたがわ}黒島神社北側
^{しどう きゅう さか みやむれざか}市道の急な坂を「宮牟礼坂」というそうです。(牟礼＝山・丘)
^{とうじ ゆうりよくしゃ しゃかい}当時は、有力者(社会で力をもった人)が^{あ ち き}荒れ地などを切り
ひらいた土地を自分の^{とち じぶん りょうち}領地としました。これを「名(みょう)」
といいます。「^{かんみょう}上名」「^{しもみょう}下名」の地名は、^{ちめい}鈴木氏の「^{すすきし}名」の^{みょう}う
ちそれぞれ^{かみて}上手と^{しもて}下手をさしたものと^{かんが}考えられます。



写真は上名黒瀬にある黒島神社の周辺

くろしまじんじゃ 黒島神社

かんみょうくろせ
上名黒瀬にあります。708年（和銅元年）2月29日、
すずきしろうまさよし
鈴木四郎政良によってたてられたと伝えられています。祭って
いる神様はかみさま うさみょうじん おおなもちのみこと すくなひこなのみこと たきりひめ
多祇留姫、
たきつひめ
多祇津姫です。

むかし ごうしゃ やまだこうく まも じんじゃ
昔は、「郷社」といって山田校区すべてを守る神社とされ、
きょうぼう きしん いしどうろう てんめい
1718年（享保3年）に寄進された石灯籠や1784年（天明
4年）につく いしばし
に造られた石橋などがあります。

まいとし げじゅん れいさい たうえまつ ひ しんじ かんみょう
毎年2月下旬の例祭では、お田植祭り、かぎ引き神事、上名
ほうおど おこな
棒踊りが行われます。



写真は黒島神社の拝殿



石橋

たきりひめ たきつひめ あまてらすおおみかみ すさのをのみこと つるぎ
多祇留姫と多祇津姫は、天照大御神が須佐之男命の剣から
う 生んだ3人の女神のうち2人で、福岡県宗像大社で祭られてい
めがみ めがみ ぶんおかけんむなかたたいしゃ まつ
る海の安全を守る神様です。
うみ あんぜん まも かみさま

やま かこ やまだ うみ かみ まつ
山に囲まれた山田に、どうして海の神さまが祭られているの
ふしぎ おも くろしまじんじや そうけん すすきしろう
か不思議に思えるのですが、黒島神社を創建した鈴木四郎とい
う人が、福岡志賀島から移り住んできたことと関係があるのか
かんけい
もしれません。

いちばんはじ やま ちょうじょう ほんでん ねん
一番始めは、山の頂上に本殿があったのですが、1709年
6月1日、山しお（やまくずれ）で水が湧き出し、山がくずれ
やま わだ やま
て、神社もおしながされ、そのとき、昔からの記録や宝物もな
じんじや なが むかし きろく たからもの
くなくなったそうです。けれども、神体だけはしっかりと山中に残
っていて、少しもよごれていませんでした。そのため、村の人
たちは、ますます黒島神社の神様をうやまって、山の中腹（山
やま ちゅうぶく
の頂上と麓の間）に
ちょうじょう ふもと あいだ
本殿を、山のふもとには
ほんでん やま
はいでん た なお
拝殿を建て直しました。

さらに、その約200
やく
年後の1913年
ねんご
（大正2年）に社殿が
たいしょう しゃでん
いま うつ
今のところに移されま
した。



三国名勝図会「黒島神社」

くろしまじんじゃ た う まつ 黒島神社お田植え祭り

くろしまじんじゃ はる れいさいび た う まつ おこな
黒島神社では、春の例祭日にお田植え祭りが行われています。

まず氏子の中から20人の人たちが、はだし、たすきがけで
じんじゃ まえ ひろば せいぞろ つぎ ひろば た み た
神社の前の広場に勢揃いします。次に、この広場を田んぼに見立
てて木で作ったくわで田を耕す動作をします。そして、二股に
なつた榎の木で作った「雄かぎ」「雌かぎ」を組み合わせて引き
あ じ しろ とき ひ あ か ま
合い、地ならし（代かき）をします。この時、引き合いに勝ち負
けはありません。雄かぎが雌かぎを鳥居の方へ引いていきます。
その後、神官がニワトコの新芽と種籾（稲の種）を混ぜたもの
ひろば しんめ くにき は
を広場へまきます。ニワトコの新芽は「かしき（草木の葉を土
にまぜて肥料にするもの）」に見立てたものです。

くろしまじんじゃ た う まつ なえ う ちよくせつ
黒島神社のお田植え祭りでは、苗を植えるのではなく、直接
たねもみ ま みる のうぎょう ほうほう おこな とくちょう
種籾を蒔くという古い農業の方法で行われるのが特徴です。

その後で「上名棒踊り」が奉納されます。昔は「田の神舞」
すもう おこな ひとびと あつ にぎ
や相撲なども行われ、たくさんの人々が集まってたいへんな賑
わいだったそうです。

このお祭りは、いつ頃から始まったという何の記録もありませんが、黒島神社がつくられた和銅の昔（708年）から、毎年
か つづ ぎ い
欠かさず続けられて来たと言われています。

くろしまじんじゃ た う まつ ししていむけいみんぞくぶんかざい
黒島神社のお田植え祭りは、市指定無形民俗文化財です。



木でつくったクワで田を耕す。



雄かぎ（左）と雌かぎ（右）で引き合う。



雄かぎの方へ引いていく。



ニワトコの新芽と種粃



神官が種粃をまく。



上名棒踊りの奉納



広場の全景

くろしま おいがみ でんせつ 黒島どんと老神どん (伝説)

昔、黒島どん（黒瀬）と老神（中津野）が、住吉池をどちらのものにするかで争いをしました。そこで、二人は日時を決めて出発し、早く住吉池についた方が池を手に入れるという約束をしました。老神どんは近いので牛、黒島どんは遠いので馬で行くことになりました。

黒島どんは、「なあに、老神は牛だ。いくら近くてもおれの馬には勝てないだろうよ。」と、途中で馬も休ませ、自分もゆっくり遊んでいました。ところが、池に着いてみると、もう老神どんは先に着いているではありませんか。そういうことで、住吉池は老神どんのものということになったのです。

腹が立ってしょうがない黒島どんは、帰り道に乗ってきた馬を鞍をつけたまま山田川の淵に落とし、まわりついてきた自分の子どももぽいぽい蹴飛ばしました。この馬や子どもたちが飛んでいったところが、豊留や東餅田で、ここに早馬神社や子烏神社が始まったといいます。また、馬を落とした淵を白鞍淵といい、上名と下名の境である羽田ノ越の下の淵がそれです。



写真は住吉池

やまだじょう 山田城

いま やく ねん まえ せんごくじだい よ なか せいじ
今から約500年ほど前の戦国時代、世の中の政治やきまり
みだ にっぽんかくち りょうち はげ たたか つづ
は乱れ、日本各地で領地をめぐる激しい戦いが続いていました。
りょうしゅ てき せ そな けわ やま りょう
領主たちは敵に攻められることに備え、険しい山などを利用し
おお しろ きず やまだじょう
て多くの城を築きました。山田城もその一つです。

1529、けどういんりょうしゅ けどういんしげたけ しまづし
1529、祁答院領主の祁答院重武は、そのころ島津氏のも
ちょうさちほう やまだ ぶく
のだった帖佐地方(山田を含む)を手に入れようと考え、不意に
ちょうさ へいあんじょう せ お よくじつ
帖佐の平安城をおそって攻め落としました。そして、その翌日
やまだじょう こうげき やまだじょう しまづたかひさ
には山田城にも攻撃をしかけました。山田城には島津貴久が
じょうしゅ かわごえみんぶ ざえもん ぶしやう
城主にした川越民部左衛門重博という武将がいました。しかし、
にちかん たたか やまだじょう らくじょう
1日間の戦いで山田城は落城してしまいます。

ねん しまづし かもうし はげ たたか すえ しげとみ
1554年、島津氏は、蒲生氏との激しい戦いの末に重富の
いわつるぎじょう せ お よくとし やまだ
岩剣城を攻め落とします。そして、翌年の1555年、山田
じょう うば かえ ちょうさへいあんじょう けどういんよししげ やぶ ちょうさ
城を奪い返し、さらに帖佐平安城の祁答院良重を破って帖佐
ちほう と もと せいこう
地方を取り戻すことに成功します。



写真は山田城があった一带(奥の方の山々)

その後、山田城は、蒲生氏との戦いにおける島津方の重要な基地として使用されますが、島津氏が支配する地域が広がり戦場が遠ざかると、役割を失っていきました。

ところで、山田城の周りには城にちなんで名付けられた地名があるので紹介します。

菖蒲ヶ迫 川越民部左衛門が戦死し、山田城が祁答院氏のものになった時に勝負がついた所が「菖蒲ヶ迫」であるといえます。英ノ口 祁答院重武が兵を大山に集め、この地で一斉に抜刀（刀を抜くこと）させました。鞘から刀を抜いたために後に「サヤノ口」と呼ぶようになったという説があります。

花立 城から板ノ口に通じる道路の城寄り付近の地名です。南側に断頭ヶ岡と呼ばれる小高い丘がありますが、その丘で昔戦いに敗れた大將が首を切られたので、花を手向けたことから花立と呼ぶようになったそうです。

坊主落とし きまりを破った僧（お坊さん）の処刑の場であったといわれます。高さ70～80mの断崖で、敵を防ぐために山を掘り割った空堀の一部であるのかもしれませんが。

また、城の城山は、昔から鎮西八郎為朝の城といわれ玉城山と呼ばれています。為朝は、平安時代の人で源頼朝や義経の叔父にあたり、武勇に優れ、特に弓の名人として有名です。鎮西（九州）各地を武力で従え、鹿児島にも勢力を伸ばしていました。実際には、山田には来ていないようですが、為朝にまつわる伝説がいくつかあります。

うめきたくにかね 梅北国兼

うめきたくにかね せんごくじだい ぶしょう しまづけ けらい かもうし
梅北国兼は、戦国時代の武将で、島津家の家来です。蒲生氏と
たたか て やまだ じとう きたやま
の戦いに手がらがあり、山田の地頭になりました。そして、北山
しろ きず やまだいったい おさ
に城を築いて山田一帯を治めました。

1592年(文禄元年)、文禄の役に際し朝鮮へ移動中、反乱
ぶんろくがねん ぶんろく えき さい ちょうせん いどうちゆう はんらん
を起こし、豊臣秀吉を殺す計画を立て、熊本葦北の棧敷城を攻
お とよとみひでよし けいかく た くまもとあしきた さじきじょう せ
め取りました。これを「梅北一揆」といいます。

いっき くわ ぐんぜい にん はんげき あ
一揆に加わる軍勢は2000人にもなりましたが、反撃に遭
うめきたくにかね しぼう う
い梅北国兼は死亡しました。だまし討ちにあったといわれます。

とよとみせいけん はんらん だいじけん とよとみひでよし ひじょう はら た
豊臣政権への反乱という大事件に、豊臣秀吉は非常に腹を立て、
うめきたいっき かんけい ひでよし はんこうてき
梅北一揆と関係しているとして、秀吉にかねてより反抗的で
しまづとしひさ しまづよしひさ おとうと ころ
あった島津歳久(島津義久の弟)を殺させました。

うめきたくにかね じとう やまだ かれ どうじょう ひとびと
かつて梅北国兼が地頭であった山田では彼に同情する人々
おお し のち きたやま かみ まつ
が多く、死んだ後は北山に神として祭られました。



写真は北山にある梅北神社

ほうおど 棒踊り

ほうおど かごしまけん だいひょうてき みんぞくげいのう りとう ぶく
棒踊りは鹿児島県の代表的な民俗芸能の一つで、離島を含む
けんない ぜんいき きんせつ みやざきけん くまもとけん いちぶ ぶんぶ
県内のほぼ全域と近接する宮崎県、熊本県の一部に分布してい
ます。

だんしせいねん ゆかた かすり きもの しろ し
男子青年が浴衣や 緋の着物にたすきがけで、白はちまきを締
さんじゃくぼう ろくしゃくぼう かま はげ う あ おど
め、三尺棒や六尺棒、鎌などを激しく打ち合わせて踊ります。

え としだい はじ ごろ じんぶつ やまぶし
江戸時代の初め頃において、ある人物が（おそらく山伏であ
ろうといわれます。）武道の棒術の型を研究して棒踊りをつく
り出し、鹿児島神宮（国分八幡宮）の御田植祭で奉納踊りされ
たものが、ばくはつてき ひろ かんが
たものが、爆発的に広まったと考えられています。

ゆうそう はげ きょくげいてき ほうおど うご じげんりゅう あさやまりゅう
勇壮で激しく、曲芸的な棒踊りの動きは、示現流や浅山流と
ほうじゅつ じっさい わざ じだい くだ
いう棒術の実際の技をうつしたものです。時代が下り
みなみきゅうしゅう かくち おど こむそうおど なぎなたおど
南九州の各地で踊られるようになると、虚無僧踊りや長刀踊
りなど多彩な波及型が生まれ、ますます人々に親しまれるよう
になっていきました。ぶ とうと かごしま ひと きしつ あ
武を尊ぶ鹿児島の人々の気質にも合ってい
たためでしょう。

のうぎょう かんけい ぶか げいのう かくち
もともと農業と関係が深い芸能であるため、やはり各地のお
た う まつ ほうのう おお あき しゅうかく いわ
田植え祭りで奉納されることが多いようですが、秋の収穫を祝
うお祭りで踊るところもあります。唄の歌詞は、地域によって違
いがありますが、「おせろが山で前は大川」「焼け野のキジは山の
せ ぶる お たうた だんべん ぶく
背にすむ」など古い『御田唄』の断片らしきものを含んでいま
す。

やまだ ちく かんみょうほうおど しもみょうほうおど
 山田地区には、上名棒踊りと下名棒踊りの二つがあります。

かんみょうほうおど ろくしゃくぼう つか ちからづよ はげ とくちょう
 上名棒踊りは、六尺棒を使う力強さや激しさに特徴のあ

おど え どじだい お かんみょう ようすいろ おおみず こわ
 る踊りです。江戸時代の終わりに上名の用水路が大水で壊れた

ことがありましたが、その修理のために雇った串木野の技術者

さんざえもん ひと おそ でんしょう
 の三左衛門という人から教わったという伝承があります。

しもみょうほうおど さんじゃくぼう かま つか うご はや はな おど
 下名棒踊りは、三尺棒と鎌を使う動きの速い華やかな踊り

やまだしょうがっこう こ おど う つ まいとししゅうき
 です。山田小学校の子どもたちが踊りを受け継ぎ、毎年秋季

だいうんどうかい ほごしゃ ちいき かたがた まえ おど
 大運動会で、保護者や地域の方々の前で踊っています。



下名棒踊り



上名棒踊り

やまだ きょうどげいのう 山田の郷土芸能

かごしまけんない たいこおど やまだ
鹿児島県内にはあちこちに太鼓踊りがありますが、山田にも
たいこおど やまだ たいこおど ゆらい
太鼓踊りがありました。山田の太鼓踊りの由来として、こんな
はなし つた
話が伝わっています。

しまづよしひろ えど い とき
島津義弘が江戸に行った時、ちょうどコレラがはやっており、
えど ひとびと しず ねんぶつおど
江戸の人々はこれを鎮めるために念仏踊りをしていました。
よしひろ ちようせん えき で きねん おど
義弘は「これはよい。われらが朝鮮の役に出た記念の踊りとし
さつま つた やまだ いけだ かじき まきのせ よ
て薩摩に伝えよう。」と山田の池田と加治木の牧之瀬を呼んで、
おど なら み つ ふたり ねっしん
この踊りを習い身に付けるようにいいつけました。二人は熱心
におぼえ、やがて帰国することになりましたが、ふこう
不幸にして、
まきのせ びょうし いけだ きこく やまだ
牧之瀬は病死してしまいました。池田は帰国すると、山田に近
かじき にしべつぷ のうみん おど なら
い、加治木の西別府の農民たちにこの踊りを習わせました。こ
たいこおど
れが太鼓踊りのはじまりであるそうです。

やまだ たいこおど いま めいじじだい なかごろ おど
山田の太鼓踊りは今から明治時代の中頃までは踊られていた
そうですが、さんねん とた
残念ながら途絶えてしまいました。



写真は加治木の太鼓踊り

ほうそうおど やまだ いま おど つ きょうどげいのう
疱瘡踊りは、山田に今も踊り継がれている郷土芸能です。

ほうそう てんねんとう げんざい しゅとう よほうせっしゅ
疱瘡とは天然痘のことで、現在では種痘という予防接種によ
って防ぐことのできる病気です。しかし、昔は死亡率が高く、
いったん流行すれば大勢の死者が出たために、人々に恐れられ
ていました。そのため、疱瘡にかからないように、またかかっ
ても症状が軽く済むようにと、寺や神社にお祈りをしたり、踊
りを奉納したりするものでした。

やまだ なら たもと いけだせんべえのじょう たいこおど そうししゅ にだい
山田奈良 袂の池田千兵衛尉は太鼓踊りの創始者ですが、二代
せんべえのじょう うた えんそう す かごしま おんぎょく
千兵衛尉も歌や演奏が好きで、鹿児島から「すてな」という音曲
の女性の師匠（先生）を招き、自宅に住まわせていたそうです。
そのすてなが教えたというのが下名の疱瘡踊りです。

かんみょうくろせ かなやまおど かんみょうほうおど はげ おど
上名黒瀬には金山踊りがあります。上名棒踊りが激しい踊
りであるのに対して、緩やかな動きの金山踊りは女の踊りとい
われます。衣装や道具が美しく華やかであるのもそのせいとし
ょうか。11月初旬に行われる上名地区の運動会で披露され
ています。



写真は疱瘡踊り



写真は上名黒瀬の金山踊り

なかつのようすいろ 中津野用水路

いま ねん まえ かわ たか とち なかつの
今から250年あまり前、川より高い土地にある中津野は、
すいでん みず ひ むすか こめ おも
水田に水を引くことが難しく、米が思うようにつけれないところ
ろでした。その土地の人々のまずしいくらしぶりを見て育った
とうじ さい しょうじょ ようすいろ すいでん
当時15歳の少女ゆきえは、どうにかして用水路をつくり水田
をつくることで、ふるさとを豊かにできないものかと考えてい
ました。

ある日、ゆきえは山田川を見下ろす女生嶽という山に登りま
した。ここは蒲生、山田、中津野などの景色が手に取るように見
える場所です。ゆきえはある考えを思いつきました。「そうだ、
なかつの じょうりゅう やまだ かわ と ようすいろ
中津野の上流にある山田で川をせき止め、そこから用水路を
ほれば、川よりも高い土地にある中津野にも水が引ける。田ん
ぼができて米がとれば、みんなのくらしはもっと豊かになる
にちがいない。」

ゆきえは用水路の工事を実現するために大人の人たちを説得
しました。はじめは子どもの言うことだからと相手にしなかつ
た人たちも、ゆきえの熱意に心をうたれ、だんだんその話に耳
をかたむけてくれるようになりました。そして、とうとう用水路
づくりの計画が実行されることになったのです。

ひとびと ちから あ こうじ はじ やまだがわ
人々は、力を合わせて工事を始めました。まず、山田川をせ
き止め、用水路に水を流しこむために山下井せきがつくられま
した。そして、そこから中津野まで長い溝がほり進められてい
きました。

しかし、^{とうじ}当時は、^{さくがんき}ショベルカーや^{べんり}削岩機などの^{きょうりよく}便利で強^{ちから}力な^ほ機械は^{きかい}ありません。すべて、^{ひと}人の^{ちから}力だけで^ほ掘られたのです。しかも、その^{みちすじ}道筋には^{ちい}小さな^{やま}山や^{おか}丘が多く、^{いわ}岩を^とくりぬいて^{とお}トンネルを^{ばしよ}通さなければならぬ^{しよ}場所が9か所もありました。

あまりに^{さぎょう}たいへんな^{こうじ}作業のため、^{ひとり}工事の^{ふたり}なかばで、^{ひとり}それまで^{きょうりよく}協力してくれた^{ひとり}人たちも^{ひとり}一人へり^{ふたり}二人へりし、^{ひとり}とうとう^{ひとり}ゆきえが^{ひとり}ただ一人^{ひとり}になってしまいました。

ゆきえは、それでも^てあきらめず、^ち手に^ち血を^ちに^ちじませ、^{ひとり}たった^{ひとり}一人で^{こうじ}工事を^{つづ}続けました。そうした、^{すがた}ゆきえの^{すがた}ひたむきな^{すがた}姿に、^{いちじ}一時は^{こうじ}工事を^{ひとひと}ぬけた^{ふたた}人々も^{どうぐ}再び^て道具を^と手に^と取り、^{よう}いっしょに^{よう}用^{すいろ}水路を^{すいろ}ほりはじめました。

1752年（^{ねん}宝暦^{ねん}2年）、^{おお}多くの^{こんなん}困難を^の乗り越え、^こついには^{やく}約^{ぜんちょうやく}1.8m～3m、^{なかつ}全長^{のようすいろ}約^{かんせい}4kmの^{なかつ}中津野^{なかつ}用水路は^{なかつ}完成^{なかつ}しました。この^{ようすいろ}用水路が^{はこ}運ぶ^{たいぼう}待望^{みず}の水によって、^{なかつ}中津野に^{なかつ}34^{なかつ}ヘクタール、^{やまだ}山田に^{すいでん}32^{すいでん}ヘクタールもの^{すいでん}水田が^{すいでん}ひらかれたのです。



水口ゆきえ祈念碑（山田）



トンネルのかべの道具のあと



中津野用水路地図

かんみょうようすいろ 上名用水路

ふる 古くからあったようすいろ 用水路です。かんみょう 上名にはしんかい 新開・ひらき 開などのちめい 地名があります。え 江戸時代としだいなかごろ 中頃にあたら 新しくひらかれたた 田ということでしょう。むかし 昔の人々は、むかし 暮らしをゆた 豊かにしよう しようとうようすいろ 用水路をほ 掘ったり、きす 築き直したりしなごら ながらた 田をひろ 広げるたどりよく 努力を おこな 行 ったのです。

ねん 1867年5月23日のごうう 豪雨（おおあめ 大雨）でやま 山しお（やま 山くずれ）がはっせい 発生し、やまだ 山田地区のちく 家やいえ 田畑のたはた 多くがどろみず 泥水にお 押しなが なが 流され、た ひがい たいへんなう 被害を受けました。かんみょうようすいろ 上名用水路のすいどう 隧道（トンネル）もくす 崩れお 落ちてて 手がつか つか られないひどい ひどいじょうたい 状態だったため、ようすいろ 用水路をなお 直すためにくしきの 串木野からにんぶ 人夫（どほくぎじゅつしゃ 土木技術者）をたの 頼んできてしゅうふく 修復こうじ 工事を おこな 行 いました。そのころ 頃のくしきの 串木野はどほくぎじゅつ 土木技術のせんしんちいき 先進地域であり、くしきのしゅっしん 串木野出身のぎじゅつしゃ 技術者は、けんないかくち 県内各地にしょうへい 招聘され（よばれ）かせん 河川のかいしゅうこうじ 改修工事などでかつやく 活躍していました。

すいろ 水路のなが 長さは1 km、うるおす うるおすすいでん 水田のめんせき 面積は23 haです。すいげん 水源になるい 井ぜきはくろしまじんじや 黒島神社のした 下にあります。



黒島神社の下にある井ぜき

うとがわようすいろ やまざきようすいろ 宇都川用水路・山崎用水路

1 宇都川用水路

がっこうのそばを流れる川を「宇都川」といいますが、これを上流へとさかのぼっていくと「鳥うて池」があります。1890年（明治23年）、樋ヶ宇都や鶴田のあたりに田を持っていた人々がこれを買取り、池に堤をつき、尺八（取水のための装置）をつくる工事を行いました。この時はいったん失敗しましたが、1895年に再びつくり直し、用水路をひらきました。関係者は、瀬戸山良敏以下49名でした。

水路の長さは4 km, 8.6 haの田が恵みを受けています。

2 山崎用水路

やまだばしのかみて、寺脇、にしだからおおやま、ふかみず、さんじうちょうへとひかれていた用水路が山崎用水路です。いつごろできたか、記録も言い伝えもありません。ずいぶん古いものだということです。30 haあまりの田に水を送っています。



宇都川用水路取水口



山崎用水路取水口（帖佐井堰）

とじょうせいと ごうし 外城制度と郷士

えどじだい かごしまはん ぶし かず た はん おお
江戸時代の鹿児島藩では、武士の数が他の藩にくらべて多か
った（人口に占める比率が全国の7%に対して25%）ので、
いちぶぶん つるまるじょう しまづし きよじょう しゅうへん かごしまじょうか お
一部分を鶴丸城（島津氏の居城）周辺の鹿児島城下に置いた
ほか だいぶぶん ぶし ちほうかくち す のうぎょう せいけい た
他は、大部分の武士を地方各地に住ませ農業で生計を立てさ
せました。かごしまじょうか す ぶし じょうかざむらい ちほう す
鹿児島城下に住んだ武士を城下士、地方に住んだ
ぶし とじょうしゅうじゅう ごうし
武士を外城衆中（のちに郷士）といたしました。

ごうし あつ ところ ふもと ひやくしょう おお ところ
郷士のたくさん集まった所を麓といい、百姓の多い所を
ざい しょうにん す ところ のまち
在といい、商人の住んだ所を野町といたしました。

かごしまはん とじょう ふもと やまだ
鹿児島藩には102の外城（麓）がありましたが、山田は
その一つで、いま ちくこうみんかん じとうかりや
今の地区公民館のあるところに地頭仮屋がありま
した。じとう げんざい しちょう やくしよく じゅうきよ やくしよ
地頭とは現在の市長にあたる役職で、その住居と役所を
か じとうかりや
兼ねたものが地頭仮屋です。



写真は地頭仮屋のあった山田地区公民館

地頭には、城下士が任命されましたが、仮屋には住んでいませんでした。地頭の下には麓の武士の中から選ばれた郷三役という3つの役職があり、この郷三役がそれぞれの地方を治めていました。郷三役とは、噺(あつかい)のちに郷士年寄、組頭、横目で、「郷士年寄」は地頭の代理、「組頭」は武芸や教育、「横目」は警察の仕事をしていました。

百姓の住む「在」には麓の郷士の中から任命された庄屋が、その在に行って住み、百姓たちからの税の取り立てや労働の割り振りなどの仕事をしていました。

こうした鹿児島藩に独特の仕組みを外城制度といいます。

ちなみに、山田の地頭仮屋をはじめ諸家の系図や文書類などの記録は、1709年(宝永6年)6月1日の大洪水で失われてしまい、ほとんど現在に伝わっていません。このときの洪水は黒島神社から地頭仮屋、人々の家もほとんど押し流してしまうほどのもので、黒島神社の社殿などは中津野まで流れていったといいます。



写真は山田麓に残る武家門



写真は山田麓の町並み

かどわりせいと 門割制度

江戸時代の鹿児島藩が農民を支配した仕組みを門割制度とい
います。鹿児島藩では、農民の数家族で「門」もしくは「屋敷」
という集団を編成し、納税や夫役（労働で治める税）の負担を
させ、支配の単位としていました。門に比べると人数が少ない
ものを屋敷といました。

この門の責任者である長を「名頭」といい、名頭の監督指示
のもとに農業に従事する人々を「名子」といいました。

門には田が割り当てられ、とれた米の約80%を年貢として
帖佐御蔵などに納めていました。門の田は郷土たちの耕作する
田に比べると、日当たりや水かかりがよかったけれど、もし門
のうちの誰かの田が不作で米がとれなかった場合は、門の連帯
責任で補い合っ**て必ず納めなければなりません**でした。

各門は蔵入門と給地門に分かれていました。蔵入門は直接藩
の御蔵に米を納めた門で、この米は藩の財源として用いられま
した。給地門は城下士または郷土に配当された門で、この門の
納める米は「旦那」とよばれる武士の家に届けられました。

また、川の治水工事や道づくり、石垣積みなどの労働にも割当
がありました。これを夫役といいます。夫役には必ず男性が出
るきまりでした。一月のうちのほとんどを夫役に出ることもめ
ずらしくありませんでした。

ちょうさまつばら おにび 帖佐松原の鬼火

倭文麻環（しずのおだまき）より

びゅうがわ かこう いちり じょうりゅう さがん ちょうさ じとうかりや
別府川の河口から一里ほど上流の左岸に、帖佐の地頭仮屋
やくしょ じとうかりや ひがしとなり なやまちまちおくら
(役所)がありました。地頭仮屋の東隣に納屋町御蔵、その
たいがん こがらすおくら みやのじょう さし くろき いむた やまさき
対岸に小烏御蔵があって、宮之城・佐志・黒木・藺牟田・山崎・
がもう やまだ ねんぐまい あつ ふね つか かごしまじょうか
蒲生・山田などの年貢米をここに集めて、船を使って鹿児島城下
はこ
へ運んでいました。

おくら ねんぐまい う と おさ しごと
御蔵で年貢米を受け取り収める仕事は、「枳取（ますとり）」
やくにん おこな ひゃくしょう
と「日傭（ひよう）」という役人が行っていましたが、お百姓
おさ こめ ます はか ますとり み み
さんが収める米を枳で量るときに、枳取が見て見ぬふりをして、
ひよう ます も こめ たい ぼう ひざ うえ
日傭が枳に盛った米を平らにならず棒でザザーと膝の上にかき
お ぶん やくとく じぶん わる
落とした分を、役得として自分のものにしてしまうという悪い
なら
習わしがありました。そのため、例えば三升の米を納めるのに
よんしょう こめ ひゃくしょう き ねんぐ いじょう
四升の米が必要で、お百姓さんたちは決められた年貢の以上
こめ みくら も
の米を御蔵へ持っていかなければならなりませんでした。

ひゃくしょう くる はらだ うらはら ふせい おこな
お百姓さんたちの苦しみや腹立ちとは裏腹に、不正を行い
あま する す もの くら ますとり くらやく
甘い汁を吸っている者たちは、どこの蔵でも枳取は蔵役をもて
ひよう ますとり きげん と い
なし、日傭は枳取のご機嫌取りをして言いなりになることが
ふつう
普通となっていたのでした。

よ こがらすおくら くらやく もちだはらむら す ますとり いえ
ある夜、小烏御蔵の蔵役が、餅田原村に住んでいる枳取の家に
で
出かけることができました。枳取は、「酒とご馳走を早く準備し
ますとり さけ ちそう はや じゅんび
る。」と立ち騒ぎ、蔵役をたいへんもてなしました。

ますとり う くらやく ますとり いえ と
枳取のもてなしを受けた蔵役は、そのまま枳取の家で泊まる

つもりでしたが、夜中にふと目が覚め、明日は上役をもてなす
という大事な用事があったことを思い出しました。そこで、あ
わてて枅取の家を出て自宅へ帰ることにしました。

帖佐松原にさしかかったのは、八つ時（今の時刻で午前二時
頃）になっていたでしょうか。蔵役は、松原の左側に立ち並ん
だ古墓の中で、青い火がひとつ燃えているのに気づきました。

「雨降りなのに何の火だろう。」蔵役は気味悪くなり横目にちら
ちら見ながら足早にそこを通り過ぎました。

一町（約110m）ほど行ったところで、蔵役は後を振り返っ
てみました。すると、その火は八方に散って燃えながら、こち
らの方へ向かってくるではありませんか。びっくりして必死に
逃げましたが、火はあっという間に追いついてきました。周り
を取り囲まれてしまいました蔵役は「助けてくれ、助けてくれ。」
と大声を上げながら、雨傘で追い払おうとしますが、傘に燃え移
りそうでした心地ありません。

松原から四、五町ほど行くと小烏の里に入ろうとする辺りに、
御蔵の日傭が住んでいる村でありました。声を聞きつけた日傭
が、家から飛び出し声のする方へ行ってみると、その声の主は
小烏御蔵の蔵役ではありませんか。「どうしてこんなに大声で叫
ばれるのですか。」と日傭いが尋ねましたが、蔵役は頭に火が
ついているような感じがして、ものも言えなかったということ
です。

へびづか 蛇塚 (伝説)

江戸時代、人々は用水路をつくったり山野を切り開いて水田を広げたり、米の収穫を増やし生活をより豊かにしようとたいへんな努力をしました。その様子は、いくつかの伝説となって残されています。

昔、山田のある郷土が、小戸ヶ谷（上名にある小字）で、川に堰をつくり水を引いて田をひらき、丘に石を積んで畑にしていきました。ある晩のことです。夜もおそくなり、うとうとしたと思う間もなく一匹の大蛇が郷土の夢枕に立ちました。そして、「あなたが、新しく拓こうとしている畑に竹やぶが残っています。どうかあと3日、あの竹やぶをそのままにしておいてください。どうかお願いします。」

と哀れな様子で郷土に頼みました。

その翌日、郷土は夢のことが気がかりでしたが、仕事の都合があったために竹やぶに火を入れ焼き払ってしまいました。

その火の勢いが天にも達しようとしたとき、大きな音が鳴り響きました。郷土が竹やぶの焼け跡に見つけたのは、黒こげになった大蛇でした。その大蛇のお腹は大きくふくらんでおり、出産直前のようなようでした。かわいそうに大蛇は、もうすぐ生まれたであろう赤ちゃんといっしょに焼け死んでしまったのです。

郷土は自らの行いを非常に後悔し、大蛇の親子の魂が安らかであるようにと、生涯祈り続けたということです。

大戸翁 (伝説)

江戸時代の中頃の事です。大戸翁は、上名黒瀬地方で水田を新たに拓くなどの開発を行なった人物であり、油干瓶、朱干瓶を持つ長者になりました。油干瓶、朱干とは、油や米を瓶に干も蓄えているということです。

これに目をつけた盗賊たちが、その財宝を盗もうと、大戸翁の屋敷がよく見下ろせる小高い山の中に潜んで、家の人たちが寝入るのを待つことにしました。

夜もおそくなり、村の人たちは家々の明かりを消して寝静まりました。盗賊たちは、いよいよ大戸翁の屋敷に盗みに入ろうと、様子をうかがったところが、庭には松明を燃やし、ワラを打つ音がして、皆まだ起きて働いているようです。そのうちには、屋敷の人たちも寝てしまおうと、盗賊たちは辛抱強く待っていました。屋敷の様子は相変わらずです。

ついに一番鶏が鳴き、夜が明けて、盗賊たちは目的を果たすことができず退散しました。

黒瀬集落の北東に、盗賊たちが毎夜集まっていたという場所が「遠目塚」という地名で残っています。

すみよしいけ はまいしかと 住吉池と浜石門 (伝説)

むかし すみよしいけ いけ ぬし わか むすめ ひとみこくう
昔から、「住吉池には『池の主』がいて、若い娘を人身御供
(人をいけにえとすること)として池に沈めないと、洪水が起こ
りあたりの村々に被害が出る。」といわれていました。そこで、
ひとびと な な まいとむすめ ひとりいけ しず
人々は泣く泣く、毎年娘を一人池に沈めていたそうです。

ことし むすめ ひとみこくう ひとびと
さて、今年はこの娘が人身御供となるのだろうか、人々
うわさ おおやま はまいしかと いえ やね ま
が噂をしあっていたところ、大山の浜石門のある家の屋根に真
しろ はね や つ た むすめ さ だ
っ白い羽根の矢が突き立ちました。これは娘を差し出せという
いけ ぬし いし つた
池の主の意志を伝えるものでした。

はまいしかと たいせつ むすめ うしな かな
さて、浜石門では、大切なかわいい娘を失ってしまう悲し
さ、みな な
さに、皆で泣きくれていましたが、そこへ、どこからともなく
ひとり ぼう た あらわ ひとびと い
一人のお坊さんが立ち現れました。そして、人々にこう言いま
した。

せん せん あつ ふとん ま
「きっちりと栓をしたひょうたんを集め、まわりに布団を巻き、
むすめ きもの き にんぎょう つく
娘の着物を着せて人形を作りなさい。それから、その人形
いけ う
を池に浮かべるのです。」

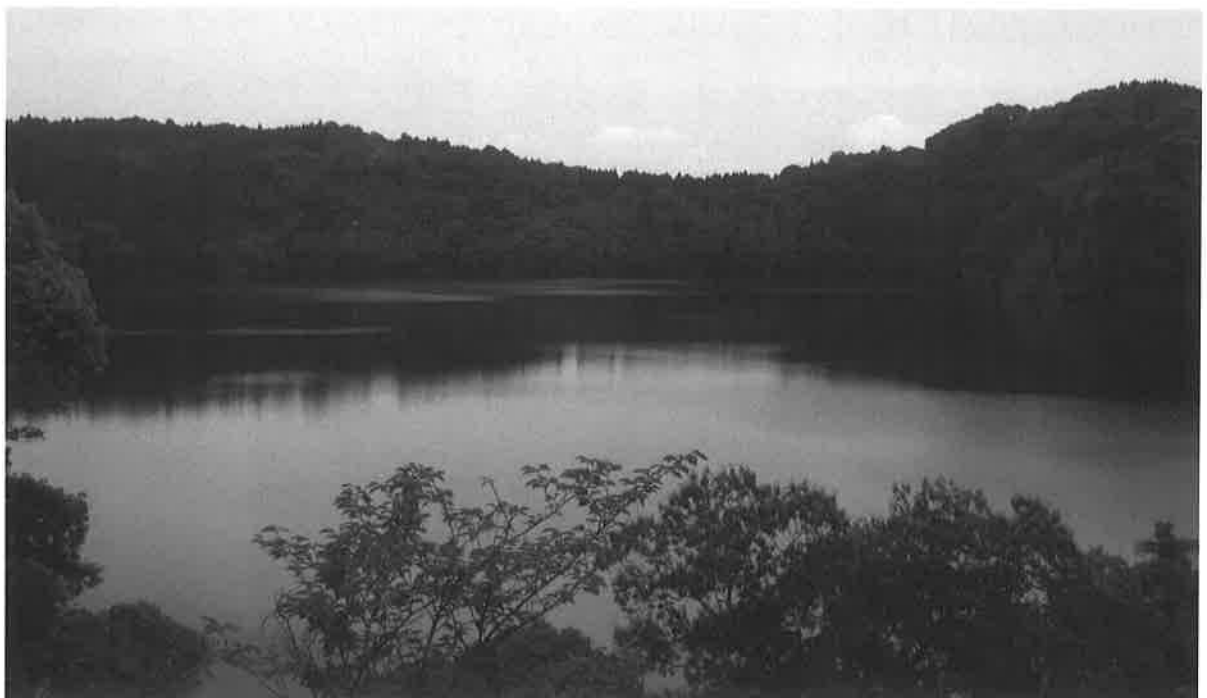
むすめ かそく みな ふ ぼう れい もう あ
娘の家族をはじめ、皆でひれ伏してお坊さんにお礼を申し上
げましたが、かお あ ふしぎ ぼう
顔を上げたときには、不思議なことにお坊さんの
すがた
姿はどこにもありませんでした。

はまいしかと ぼう にんぎょう つく すみよし
浜石門では、お坊さんに言われたとおりに人形を作り、住吉
いけ う いま は そら ま くら くも
池に浮かべました。すると、今まで晴れていた空が真っ黒な雲で
おおつが あめ はげ ふ つよ かせ
おおわれると、たちまち大粒の雨が激しく降りだし、強い風

ふ はじ が吹き始めました。だれかのさけ ごえ ひとびと いけ み いけ ま
ん中が渦巻き、そこに見るも恐ろしい大蛇が姿を現している
ではありませんか。

だいじゃ にんぎょう およ おお くち
大蛇は、人形めがけてまっしぐらに泳いでいき、大きな口を
あ 開けておそいかりました。しかし、にんぎょう
うたんがはい 入っているために、みず なか ひ こ
ません。つるりつるりと逃げるに にんぎょう お まわ
に、いけ ぬし たいりよく きりよく つか は くち ち は
てとうとう死んでしまいました。

はまいしかど なが あいだ すみよいいけ おも くる
浜石門はもちろん、長い間、住吉池の主に苦しめられていた
しゅうへん ひとびと おおよろこ
周辺の人々は大喜びをしました。そして、「それにしても、あ
のぼう お坊さんは、だれだったのだろうか。きっとしゅぎょう かさ えら
い方だったに違いない。」と池の畔に「聖の宮」を建て、ふしぎ
なぼう お坊さんとだいじゃ うろこ いっしょ まつ
大蛇の鱗を一緒に祀ったそうです。



にしだ た かみ 西田の田の神

ほうきしん ぶんか きのとうし しがつきちじょうにち あいらぐん やまだにしだ
「奉寄進 文化2年乙丑 四月吉祥日 始羅郡 山田西田

じょうげごじゅう こくめい ぶんか えど
「上下郷中」と刻銘があります。文化2年は1805年（江戸
じだいこうき いま やく ねんまえ はかま
時代後期）で今から約200年前です。袴をはき，タスキがけ
をして，頭にはシキ（甑簀：餅米などを蒸すときに間に引く藁製の
あたま こしきす もちこめ む あいだ ひ わらせい
の編み物）をかぶり，右手にはメシゲ（しゃもじ）を持ち，左
あ もの みぎて も ひだり
手は小手をかざしています。また，しゅいろ ぬ かお た
た目尻と眉，大きな鼻，おちょぼ口は，ユーモラスで見る人の
めじり まゆ おお はな ぐち み ひと
心（こころ）を和ませる親しみやすさがあります。

となり なら ひ かみさま そう ひだり ほくら
隣に並んでいるのは火の神様です。この像の左にある祠に
はえびすさま（しょうばい かみ まつ とうなん
はえびす様（商売の神さま）が祭られていましたが，盗難にあ
い，かわりにこうつうあんぜん かみさま まつ
い，かわりに交通安全の神様が祭られています。

いねか お がつはじ ころ にしだじちかい かたがた ぜん
稲刈りが終わる11月初め頃，西田自治会の方々が，お膳に
りょうり に さしみ す もの はん しゅき
のせた料理（煮しめ，刺身，酢の物，ご飯）とカラカラ（酒器）
い しょうちゅう そな あと しゅうかいじょ いんしよく
に入れた焼酎を供え，その後，集会所で飲食をします。



写真は西田の田の神（右）

せっかんとう 石敢當

せっかんとう ちゅうごく でんらい ふうしゅう ふうけんしょう はじ い
石敢當は中国から伝来した風習で、福建省で始まったと言
われています。日本では、主に沖縄や鹿児島県で見られます。

「せきかんとう」「いしがんとう」などとも読みます。

いしがんとう なまえ ゆらい ちゅうごく ぶしょう なまえ りきし なまえ
石敢當の名前の由来は、中国の武将の名前や力士の名前とさ
れますが、他にも違う説があります。

ていじろ さんさろ つ あ いしがんとう もう まもの
丁字路や三叉路などの突きあたりに石敢當を設け、魔物が
しゅうらく はい ふうせ まよ まもの ちよくしん
集落に入ってくるのを防ぐ魔除けとしました。魔物は直進す
る性質があり、石敢當に当たると砕け散るとされたためです。

あくま よ つ ふうしゅう じゅうこや つな
また、悪魔を寄せ付けないための風習として、十五夜の綱を
つくるときに大きなぞうりを作って、木の枝にぶら下げること
もしていました。これは「この集落にはこんな大きなぞうりをは
ちから つよ もの まもの けいこく い み
く力の強い者がいるんだぞ。」という魔物への警告の意味です。



写真は新馬場久永医院近くにある石敢當

いっこうしゅう きんせい かく ねんぶつ 一向宗の禁制と隠れ念仏

かごしまはん いっこうしゅう じょうどしんしゅう しんこう きび
鹿児島藩では、一向宗（浄土真宗）を信仰することを厳し
く禁止していました。それは、せんごくじだい もんと いっこうしゅう しん
じろびと しゅくん とのさま めいれい いっこうしゅう ほう おも かんが
（ひとびと）が、主君（殿様）の命令よりも一向宗の方を重く考
え、しばしばいっき だんけつ けんりょくしゃ たいこう お
（いっき だんけつ）（団結して権力者に対抗すること）を起こし
てきたためだと考えられています。

けいちょう しまづよしひろ だ おきてがき
慶長2年（1597年）2月22日、島津義弘が、出した掟書
じゅう さいご いっこうしゅう きんしれい だ ほうりつてき
二十二条の最後に、一向宗の禁止令を出しました。法律的に
いっこうしゅう きん はじ ねんご けいちょう
一向宗を禁じたのはこれが始まりです。4年後の慶長6年（1
601年）には正式なものが出され、かごしまはん やく
鹿児島藩では、約300
ねんかん いっこうしゅう きび と し いっこうしゅう きん
年間にわたり一向宗を厳しく取り締まりました。一向宗を禁
止したのは、ぜんこく かごしまはん ひとよしはん くもとけんなんぶ
（ぜんこく）（全国）で鹿児島藩と人吉藩（熊本県南部）だけです。

いっこうしゅう しんじや しんこう す こう おな もくてき
しかし、一向宗の信者は、信仰を捨てず、「講」（同じ目的を
そしき ひそ かく あみだぶつ おが
もった組織）をつくって、密かに隠れて阿弥陀仏を拝みました。
かく ねんぶつ かごしまはん かくち こう
これを隠れ念仏とといいます。鹿児島藩の各地にいくつもの講が
やまだ さんえこう たばこう しょうこうこう こう
あり、山田にも「三会講」「煙草講」「焼香講」という3つの講
がりましたが、その中でもなか さんえこう おお だんたい
「三会講」は大きな団体で、上、
くみ
中、下の三組からなっていました。

上組 — 吉松、京町、加久藤

中組 — 霧島、東襲山、溝辺、牧園、嘉例川

下組 — 横川、山田、木津志

やまだ さら わ こ こ
山田は、これが更に分かれて、5～6戸から10戸くらいの

しょうだんたい
小団体となり、それぞれ丸尾寺、田原寺、中村寺、蔵敷寺、中津野寺、隈原寺、辺川下寺、菖蒲谷寺、内山田の池田寺などと称して（寺といっても建物などはありません。）

これらの団体には番役がいて、日常の説教や葬儀を執り行っていました。仏像は、全ての人が手に入れられるものではなく、また発見される恐れがあるため、団体に1体か2体を所有していて、これを拜む日も、1日、15日、25日と決めていました。その日には、25才以上の青年たちは要所要所に立ち番をし、役人に発見されるのを防いだそうです。一向宗の信者が、隠れて拜んだ場所は次のようなところでは

【大寺】

おおやま おく てんぶん ねん ほうのう ぶつぞう
大山の奥、天文15年（1546年）に奉納された仏像があるので、古い時代の寺の跡とされます。いつしか寺はなくなって、ここで一向宗の隠れ念仏が行われました。

【奈良袂の鍛冶屋跡】

さんちゆう ぶつぞう だん あな
山中に、仏像をかける段のついた穴がまがあるそうです。

【西別府の隠れ迫】

いたのくち せとだん ぶきん しんじゃ かく ねんぶつ おこな ぼしよ
板ノ口から瀬戸段付近の信者が、隠れ念仏を行った場所。

いっこうしゅう しんじゃ やくにん み ぶつぞう や す
一向宗の信者であることが役人に見つかり、仏像を焼き捨てられた上にひどい刑罰を受け、一向宗をやめることを誓わされました。死刑も行われたそうです。

いっこうしゅう しん ゆる せいなんせんそう ねん
一向宗を信じるのが許されたのは、西南戦争（1877年）の後のことです。

はいぶつきしゃく 廃仏毀釈

はいぶつきしゃく
「廃仏毀釈」というのは、^{ぶつきょう はい こわ} 仏教を廃し（壊すこと、なくすこと）^{しんとう くに しゅうきょう} 神道を国の宗教にしようとする^{せいじてきうんどう} 政治的運動です。

はいぶつきしゃく
廃仏毀釈によって、^{かごしまけんない} 鹿児島県内にあった^{じいん すべ} 1616の寺院は全て^{はいし ぶつぞう しょもつ はかい しょうぎやく} 廃止され、仏像や書物は破壊または焼却されました。また、^{ほう} 2966人のお坊さんがやめさせられました。

^{かごしまけん} 鹿児島県では、^{ぜんこくてき み} 全国的に見てもっとも激しく^{はげ はいぶつきしゃく じっこう} 廃仏毀釈が実行^{とき じいん きちょう ぶんかざい きろくぶんしょ} されました。この時に寺院にあった貴重な文化財や記録文書などがほとんど^{しょうめつ} 消滅してしまったことは、^{ひじょう ざんねん} 非常に残念なことです。^{やまだ すべ じいん こわ} 山田にあった全ての寺院も壊されました。

ぎよくじょうぜんぶくじょうしゆんいん 玉城山禅福寺陽春院

^{かんみょう じょう} 上名の城にありました。^{かごしまし そうとうしゅうぶくしやうじ} 鹿児島市にあった曹洞宗福昌寺^{しまづし ぼだいじ まつじ ねん まえ むろまち}（島津氏の菩提寺）の末寺で、今から500年くらい前（室町^{じだい}時代）にできたと^{かんが} 考えられます。

はいぶつきしゃく
廃仏毀釈によって破壊され、^{はかい げんざい ほう} 現在はお坊さんのお墓と一部が^{こわ におうそう のこ におうそう ほうれき} 壊れた仁王像が残っています。この仁王像は、1760年（宝暦^{かんみょう つるかど ほうのう}10年）11月に上名の水流門より奉納されたものです。

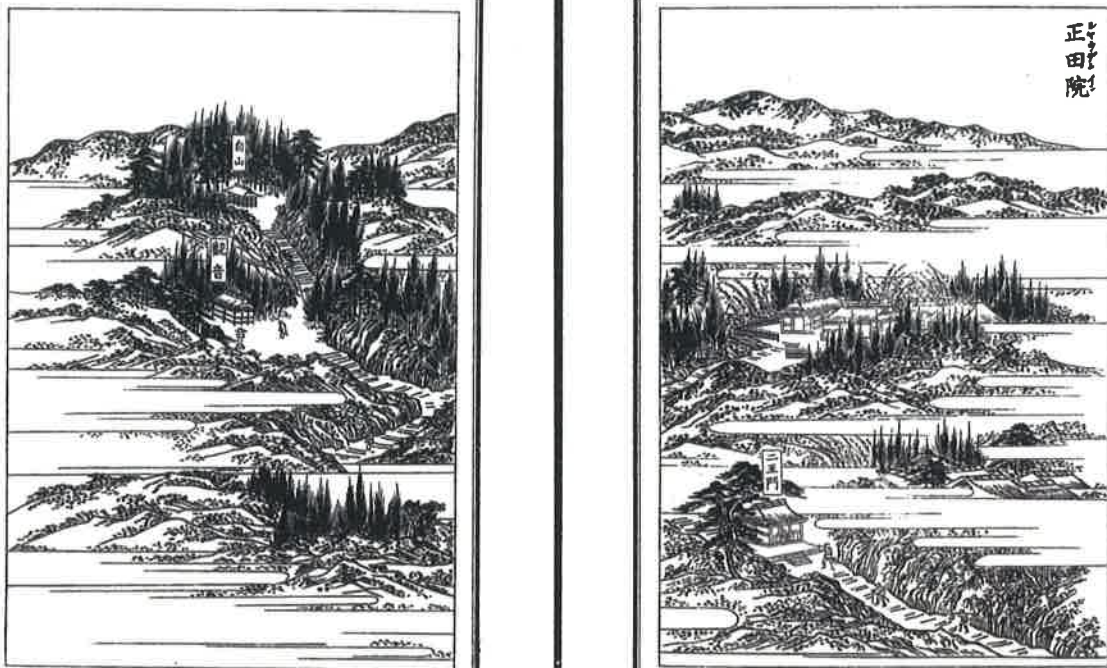
しょうわ
1964年（昭和39年）6月、この寺のあった場所の付近か^{ふどうみょうおう どうぶ はっけん げんざい やまだしょうがっこう} ら不動明王の頭部が発見されました。現在は、山田小学校の^{こうちやうしつ ほかん} 校長室に保管されています。



写真は陽春院跡の仁王像

ほうしゅさんしょうこうじしょうでんいん
宝珠山勝高寺正田院

しもみょう つるだ じいん かごしまし しんごんしゅう
 下名の鶴田にあった寺院です。鹿児島市にあった真言宗
 だいじょういん まつじほんぞん やくしにょらい せいきなかごろ むろまちじだい
 大乘院の末寺で、本尊は薬師如来。16世紀中頃（室町時代）
 つく かんが ひょうこう たかだい
 に創られたと考えられます。標高70mほどの高台にあり、
 ちょうさ まつばら きんこうわん ゆき はんせん なが
 帖佐の松原や錦江湾を行き来する帆船を眺めることができました。
 とく み さくらじま けしき ゆうめい
 た。特にここから見る桜島の景色はとても有名だったそうです。



写真は三国名勝図会正田院

じょうこうじ せんすい でんせつ 城光寺の泉水 (伝説)

むかし なかがわら じょうこうじ てら おお におうそう
昔、中川原に城光寺というお寺がありました。大きな仁王像
た さんもん がらん た おお てら
が立つ山門があり、5つの伽藍が建つ大きなお寺であったそう
です。このお寺の和尚さんは、がくしき たか えら かた とのさま
学識の高い偉い方で、殿様から
しんよう
もたいへん信用されていました。

とし おしょう とのさま とも とお みやこ のぼ
ある年、和尚さんは、殿様のお供をして遠い都に上りました
かえ じゅっさい うつく こそう つ かえ
が、帰りに十才くらいの美しい小僧さんを連れて帰ってきま
した。小僧さんはたいへんりこうだったので、きっと偉いお坊さ
んになるだろうと、むらびと うわさ あ
村人たちは噂合いました。

すうねん ねんげつ た こそう そう せいちょう
数年の年月が経ち、小僧さんはりっぱな僧に成長しました。
ころ ちほう はげ いくさ お いくさ いくど く
その頃、この地方に激しい戦が起こりました。戦は、幾度も繰
かえ おお ぶし し
り返され、多くの武士たちが死んだりけがをしたりしました。
じょうこうじ わか そう おしょう ねが いくさ きす ぶし
城光寺の若い僧は、和尚さんをお願いして、戦で傷ついた武士
たちを、てきみかた べつ てら う い てあつ かんご
敵味方の別なくお寺に受け入れ、手厚く看護をしまし
た。

そう てら で せんすい にん きすぐち
僧たちは、お寺にわき出ている泉水で、けが人の傷口をきれ
い ぶ まいにち せんすい ゆ あ
いに拭きました。そして、毎日その泉水で湯浴みをさせました。
ふ し ぎ きすぐち いた
すると、不思議なことに傷口はふさがり、痛みもなくなるので
した。

なが いくさ お きす なお ぶし てき みかた
やがて、長い戦も終わり、傷の治った武士たちは、敵も味方
そう あつ れい い かえ
もなく僧たちに厚くお礼を言って、帰っていきました。

てきみかた くべつ ちりょう じょうこうじ わか そう おこな
しかし、敵味方を区別せず治療した城光寺の若い僧の行い

を、敵の回し者（スパイ）ではないかと疑う噂が立ちました。
やがて、その噂を殿様の耳に入れる者がいて、殿様は城の武士
たちに僧を捕まえてくるように命令しました。

村人たちは心配して、若い僧に早くどこかに逃げるように勧めました。しかし、僧は、美しい顔にただ静かな笑みを浮かべるだけでした。

その夜半のことでした。村人たちは、天地がひっくり返らんばかりの大きな雷鳴のような音に飛び起きました。そして、城光寺の全ての建物が、火を噴いて燃え落ちるのを見ました。

その後、若い僧の姿を見た者は誰もいなかったといひます。僧が治療に使った泉の水は、その後も長く村人たちが湯治に使ったということですが、今はその跡形もありません。

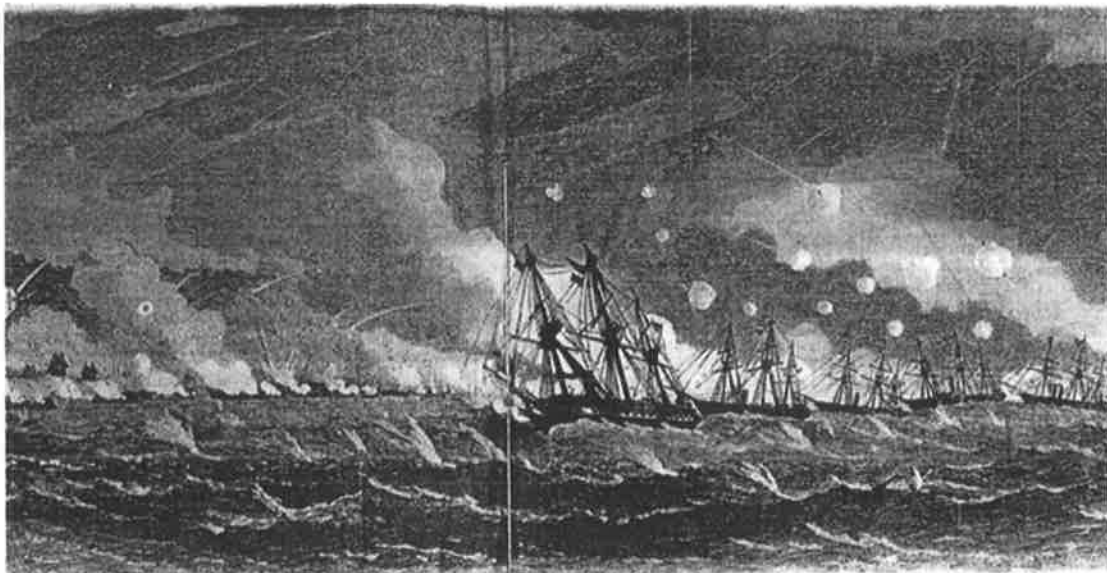


城光寺があったと言われる場所、左下の茂みの中に板碑（室町時代作）がある。

やまだ さつえいせんそう 山田と薩英戦争

1862年（文久2年）8月21日、江戸（現在の東京）から鹿児島へ帰る途中だった島津久光（鹿児島藩主の父）の行列に、イギリス人4名が馬を乗り入れてきました。そのため、数名の藩士が刀を抜いて斬りかかり、イギリス人4名のうち1名が死亡、2名が重傷を負いました。これを「生麦事件」といいます。（事件のあった生麦村は、現在の神奈川県横浜市）

イギリスは、生麦事件の犯人の処罰と賠償金を要求しましたが、鹿児島藩はこれに応じませんでした。そのためイギリスは、武力で脅し交渉を優利に行うために、1863年6月27日、軍艦7隻を鹿児島湾に侵入させました。しかし、鹿児島藩とイギリスの交渉はうまくいかず、7月2日にイギリスが鹿児島藩の船を拿捕（他国の船を捕まえること）したことをきっかけに戦闘が起こりました。これを薩英戦争といいます。



イギリス艦隊は、台場（大砲陣地）だけでなく、城下町の民家にたいしても、砲撃やロケット弾攻撃を加え、おりからの強風のため大規模な火災が発生しました。陸上砲台や近代工場を備えた集成館も破壊されました。

鹿児島の大砲は、イギリス艦隊に比べると射程距離が短く、性能も劣っていましたが、悪天候のため思うように船を動かさず大砲のねらいも定まらないイギリス艦隊は、予想外の苦戦をすることになりました。

鹿児島藩の大砲によるイギリス艦隊の損害は、大破1隻・中破2隻の他、死傷者は63人（旗艦ユーライアラスの艦長・副長の戦死を含む死者13人、負傷者50人）でした。一方鹿児島藩側は人的損害は死者5～8人、負傷者18人程でしたが、城下町の広い範囲や藩汽船3隻、民間船5隻を焼失するなど物的損害は甚大でした。

この戦争に、山田からは、郷士年寄瀬戸山藤太以下51名が出陣していますが、山下堅之丞という21才の若者が、頭部に弾の破片があたり戦死しています。



薩英戦争記念碑（鹿児島市祇園之洲）



鹿児島藩の使用した大砲

ちそかいせい 地租改正

えどじだい ぜい とち せいさんりょく こくだか こめ せいさんだか あらわ
江戸時代の税は、土地の生産力を石高(米の生産高)で表し、
その石高に応じて「年貢」を納めさせるものでした。また、年貢
は、直接に生産者から米で取り立てられました。

1873年(明治6年)、明治政府は、それまでの税の制度を
改め、土地の価値に見合った金銭(地代の3%)を、土地の持
ち主に納めさせる全国統一の課税制度を導入しました。これを、
地租改正といいます。

しかし、鹿児島県では、相変わらず、取れ高1石(粃)につ
いて3斗9升8合(玄米)を税として納めるという古い制度の
ままでした。

1合×10=1升, 1升×10=1斗, 1斗×10=1石

ちなみに、粃1石は玄米にすると半分に減ります。そのため、
鹿児島藩では八公二民(年貢80%生産者20%)であったと
いわれています。

そのため、まず都城の農民たちが、早く金納(金銭で納め
る)にすべきであると騒ぎだし、続いて帖佐の松原でも騒ぎが起
こりました。山田でも、同じ騒ぎが始まったので、区長として
加治木にいた別府晋介や副区長の越山休蔵が山田に乗り込み、
山田戸長の瀬戸山良知、竹下六郎と一緒に、代表の農民たち
を説得しています。

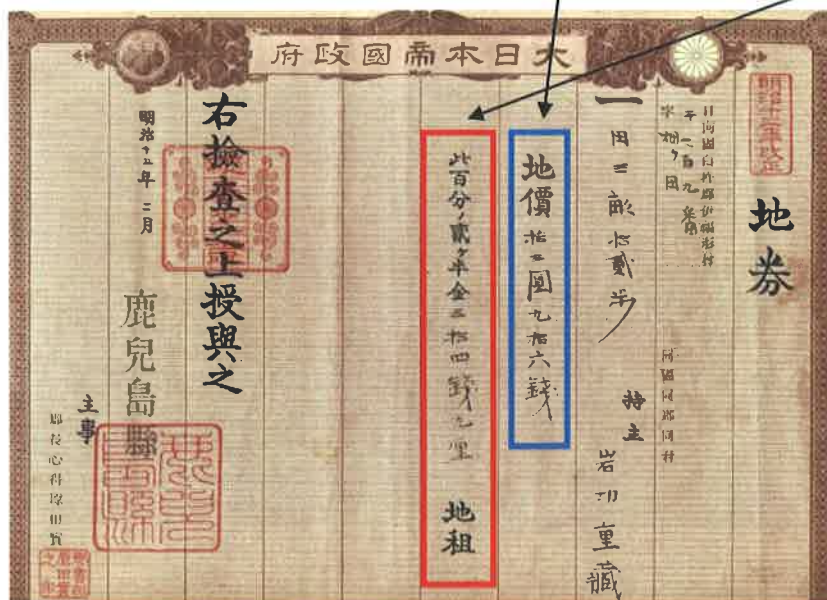
鹿児島においては、士族(元武士)たちは地租改正に反対で

した。江戸時代、武士は殿様に与えられた知行地で農民が作る米から収入を得ていました。しかし、明治になり、その知行地が、農民に分け与えられたために収入が減ってしまいました。その上に、自分で作った米には農民と同じだけの税を納めることになりました。それまでは、取れ高1石につき八升余りだったので、一気に税が重くなり生活が苦しくなったのです。

また、廃刀令（1876年）により刀の携帯が禁止されたことや徴兵制などの新しい制度がしかれたことなど、政府に対する不満をつのらせた士族たちは1877年（明治10年）に西南戦争を起こしました。

そのために鹿児島県では、地租改正への着手が遅れ、これが完全に実施されたのは、西南戦争後の1881年（明治14年）でした。

下の写真は、1882年（明治15年）に鹿児島県から土地の所有者に与えられた「地券」で、地価（土地の値段）と地租について記されています。



やまだしょうがっこう 山田小学校

1869年(明治2年)、山田地頭の仁礼平輔は、山田に学問所
を設置を設置することを決め、山田の地頭仮屋(地頭の住居で
あり政治を行ったところ)を仮校舎として授業を始めました。
鹿児島県では、廃仏毀釈で職を失ったお坊さんを先生とし
て起用する例が多かったようですが、山田では加治木の長年寺
のお坊さんだった隈元直次郎が、「授読助・漢字掛」として、士族
(武士)の子どもたちに学問を教えました。

1872年(明治5年)、学制が公布され、学問所を学校とし、
外城89郷校と名前を変えました。明治8年に学制が改正され、
士族だけでなく一般の子どもたちも入学できるようになりま
した。そして、1876年(明治9年)に正則小学校「山田小学」
が誕生。これを山田小学校の創立としています。



写真は山田地頭仮屋跡(現在は山田地区公民館)

おな とし やまだしょうがく ぶんこう おおやま ひ え しょうがく かんみょう
同じ年、山田小学の分校として大山に日枝小学、上名に
いなりしょうがく そうりつ
稲荷小学が、創立されました。

1886年（明治19年）、しょうがっこうれい かいせい やまだじんじょう
小学校となりました。尋常科は義務教育でした（4年間）。

1898年（明治31年）、げんざい きゅうのうきょうやまだししょ いてん
改築されました。翌年には、やまだむらじょしほしゅうか せっち
山田村女子補習科を設置。

1909年（明治42年）、ぎむねんげん かんみょう
義務年限を6カ年とし、上名の
いなりじんじょうしょうがっこう おおやま ひ え じんじょうしょうがっこう へいごう
稲荷尋常小学校と大山の日枝尋常小学校を併合し（いっし
よにあ合わせること）、きょうしつ こうしゃ とう そうちく
4教室の校舍1棟を増築しました。



写真は旧農協山田支所

やまだしょうがっこう げんざい ばしょ いてん しょうわ
山田小学校が、現在の場所に移転したのは、1930年（昭和
5年）です。

1946年（昭和16年）4月、が つ やまだこく민がっこう なまえ か
山田国民学校と名前を変え、
ぐんこくしゅぎきょういく
軍国主義教育が行われました。

1947年（昭和22年）、しょうわ げんざい やまだしょうがっこう
現在の山田小学校となりました。

せいなんせんそう 西南戦争

1877年（明治10年）、明治新政府の政治に対して不満をもつ鹿児島（^{かごしま}）の士族（^{しぞく}）（^{ぶし}）は、西郷隆盛（^{せいこうたかもり}）を指導者（^{しどうしゃ}）として反乱（^{はんらん}）を起こしました。これを西南戦争（^{せいなんせんそう}）（^{せいなん}）の役（^{えき}）とといいます。

薩軍（^{さつぐん}）（^{かごしましぞく}）の軍勢（^{ぐんせい}）13000人が鹿児島（^{かごしま}）を出発（^{しゅっぱつ}）したのは2月15日、50年来（^{ねんらい}）といわれる大雪（^{おおゆき}）の積もる中（^つ）、熊本（^{なか}）を（^{くまもと}）目指（^{めざ}）して進（^{すす}）みました。

薩軍（^{さつぐん}）は7つの大隊（^{だいたい}）で編成（^{へんせい}）されていましたが、始良（^{あいら}）方面（^{ほうめん}）から参加（^{さんか}）した士族（^{しぞく}）は、独立（^{どくりつ}）1番大隊（^{ばんだいたい}）（^{のち}）に6番大隊（^{ばんだいたい}）と独立（^{どくりつ}）2番大隊（^{ばんだいたい}）（^{のち}）に7番大隊（^{ばんだいたい}））に編入（^{へんにゅう}）されました。連合（^{れんごう}）大隊長（^{だいたいちよう}）は別府（^{べっふ}）晋介（^{しんすけ}）という人物（^{じんぶつ}）でした。

山田（^{やまだ}）からは、7番大隊（^{ばんだいたい}）3番小隊（^{ばんしょうたい}）97人（^{たいちようせどやまよしとも}）（隊長（^{たいちよう}）瀬戸山（^{せとやま}）良知（^{よしとも}））と7番大隊（^{ばんだいたい}）8番小隊（^{ばんしょうたい}）100人（^{たいちようたけしたろくろう}）（隊長（^{たいちよう}）竹下（^{たけした}）六郎（^{ろくろう}））の2つの小隊（^{せうたい}）が編成（^{へんせい}）され、2月15日（^{やまだ}）山田（^{しゅっぱつ}）を出発（^{しゅっぱつ}）しています。



当時の錦絵に描かれた西郷軍出陣の図

薩軍は、熊本城に籠もる政府軍を攻撃しましたが、熊本城を
攻め落とすことができませんでした。その後、北上をしたもの
の増え続ける政府軍のために押し戻され、田原坂（熊本県）の
激戦で敗れたのを境に力を失ってしまいました。その後、
九州の各地に分散し戦いを続けますが、鹿児島市の城山で
最後の戦いが行われ西南戦争は終わります。

山田から参加した瀬戸山良知隊は、西南戦争最大の激戦が行
われた「田原坂の戦い」に参加しています。3月8日午後1時、
官軍（政府軍）が田原坂の薩軍陣地に大勢押し寄せてきました。
瀬戸山隊は奮戦し官軍を防ぎましたが、両軍の鉄砲の先がふれ
合うばかりに接近し、非常に激しい戦いだったそうです。その
後は度重なる戦いで弾薬がなくなり、刀を振るって切り込む
白兵戦が行われるようになりました。そして、多くの人々が傷
つき、あるいは戦死しました。

竹下六郎隊は、はじめ熊本城付近の守備につきましたが、そ
の後、三田井（宮崎県）、馬見原（熊本県）、須木（宮崎県）
など各地を転々と戦い続けました。そして、8月7日、宮崎県
日向市で政府軍に降伏しています。

この2隊以外にも、後から参加した人が33名おり、山田か
ら従軍したのは合計230名、そのうち57名が戦死しました。

さいごうたかもり こしか いし 西郷隆盛の腰掛け石

1877年（明治10年）の西南戦争の時、宮崎県延岡市で政府軍に追い詰められた西郷隆盛は、その囲みを必死に突破し鹿兒島城下を目指しました。西郷隆盛たちは、途中何度も政府軍と戦闘を行いながら移動を続け、8月30日、山田に到着しました。

6か月間も激しく戦い、政府軍の目を避け険しい山の中を歩いてきたために、西郷隆盛に同行した人たちの衣服は破れ、草鞋（藁で作った履き物）もなく素足の人もいたということです。西郷隆盛は、新馬場の瀬戸山十郎宅で休息をとりましたが、家にあった帖佐人形をたくさん並べ、それを見て楽しんだそうです。その時、西郷が腰掛けたという石が「西郷隆盛の腰掛け石」として庭に残っています。



せいなんせんそうしょうこん ひ 西南戦争招魂碑

がいせんもん をくぐり、2つのいしだん のぼ き いただき しょうこんしゃ
凱旋門をくぐり、2つの石段を登り切った頂に、招魂社
と5基のせきひ た ます。このうちみぎがわの2基が
せいなんせんそうかんけい ひ まえ ひ しょうめん せんぼうしょうこんひょう もじ
西南戦争関係の碑で、前の碑には正面に「戦亡招魂表」の文字、
そくめん めいじ ねん がつ くわく ひ こんりゅうねんげつ はいめん せとやま
側面に明治12年3月（空白）日と建立年月、背面には瀬戸山
よしとも い か めい せんししゃめい きざ
良知以下61名の戦死者名が刻まれています。

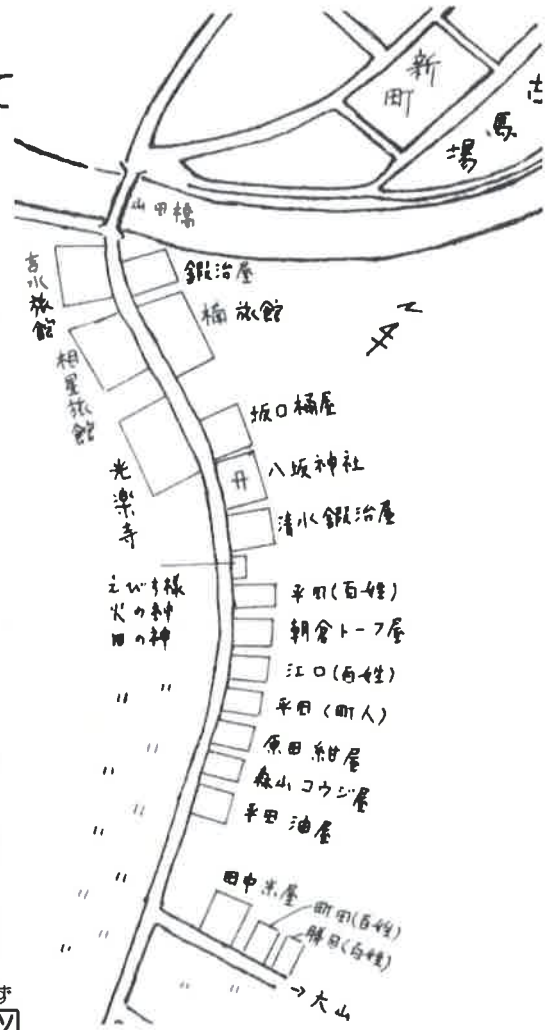
うしろ ひ たいしょうがねん ねん がつ こんりゅう
後の碑は、大正元年（1912年）10月に建立されたも
ので、しょうめん せいなんえききねん ひ はいめん ひ た
正面には「西南役記念碑」とあり、背面には碑を建てた
ゆらい けんぴ たけしたろくろう めい せいなんせんそうじゅうぐんしゃ
由来と建碑を行った竹下六郎ほか168名（西南戦争従軍者）
しめい きざ
の氏名が刻まれています。



にしだのまち 西田野町

えどじだい かごしまはん ふもと りんせつ
江戸時代、鹿児島藩では麓に隣接して
しょうぎょう おこな ちいき のまち
商業を行っていた地域を野町といいま
にしだのまち やさかじんじゃ しょうばい
した。西田野町に「八坂神社」(商売の
かみさま こんりゆう ねん あん
神様)が建立されたのは1774年(安
えい ころ にしだのまち
永3年)ですから、この頃には西田野町
すて せんざい ぶんせいねん
は既に存在していたのでしょう。文政年
かん ころ
間(1818年~1830年)の頃には
にん や あぶらや こんや そめもの
6人が「こうじ屋」「油屋」「紺屋(染物
や いとな
屋)」などを営んでいました。

めいじ たいしょう やまだばし きたがわ
明治から大正にかけて、山田橋の北側
そんがい しょうにん いじゅう しんまち
に村外から商人たちが移住してきて新町
しょうてんがい にしだの
商店街ができました。そのため、西田野
まち おとろ むかし いま ちす
町はすっかり衰えました。昔と今の地図
くら
を比べてみるとおもしろいですよ。



写真は西田野町があったあたり

にっしんせんそう 日清戦争

イギリス、フランスなどの欧米の国々は、インドなどアジアの国々を侵略して植民地にしていました。さらに、清（中国）に戦争をしかけるなどして、領土や権利をうばいました。また、シベリアを征服したロシアも東アジアに迫っていました。

こうした危機に目覚め、明治維新によって新政府を成立させ、いち早く近代的な国家づくりを始めることができたのが日本であり、遅れたのが朝鮮でした。

日本は、欧米の侵略に備えるために、朝鮮に対して開国と近代化を行うよう交渉を重ねました。しかし、朝鮮は国内での権力争いを続けるばかりで改革を実行できませんでした。さらに、清は、朝鮮の宗主国（主人の国）であるとして、朝鮮が国の体制を変えることに反対し、改革を妨害しました。

1894年（明治27年）、朝鮮南部に反乱が起きました。この反乱を自力で解決できなかった朝鮮政府は、清に助けを求めました。日本は、これを機に朝鮮から清の勢力を追い出し、朝鮮を独立させようと、清との戦争に踏み切りました。

日清戦争は、日本優利のままに進み、1895年（明治28年）下関で日清講和条約が結ばれました。日本はこの条約で、清に朝鮮を独立国と認めさせ、台湾などを日本の領土としました。また、多額の賠償金を支払わせました。

山田地区からは、日清戦争に13人が参加しています。

にちろせんそう 日露戦争

日本は、日清戦争に勝利しましたが、満州（中国東北部）と朝鮮の支配をめぐってロシアと対立を深めるようになり、関係が急激に悪化します。こうして1904年（明治37年）起こったのが日露戦争です。

日本は、陸軍が旅順や奉天の戦い、海軍が日本海海戦で勝利するなど優位に立ち、1905年、ポーツマスで講和条約の調印が行われました。

日露戦争には、山田地区から合計113人（陸軍88人、海軍25人）が参加し、14人が戦死しています。

日本は、日露戦争後、朝鮮を併合し、満州事変から日中戦争、太平洋戦争へと突き進んでいくこととなります。



招魂社にある慰霊碑のうち左側後方の2基が日清・日露戦争関係のもので、左前の慰霊碑が1908年（明治41年）に建てられたもので、「忠魂碑」の文字を大山巖元帥が書いています。

がいせんもん 凱旋門

やまだ ち く こうみんかん となり おお いしづく もん
山田地区公民館の隣に大きな石造りの門があります。これは、
にちろせんそう しょうり じゅうぐん やまだ ち く ひと きかん いわ
日露戦争の勝利と従軍した山田地区の人たちの帰還を祝って、
1906年（明治39年）に建てられたものです。

おくゆ はば たか いしづく
奥行き1.21m、幅0.9m、高さ4.71mの石造りの
がた かごしま すく いしばしぎじゅつ つか
アーチ型をしており、鹿児島の優れた石橋技術が使われていま
せきざい ぎょうかいがん い つた かんみょう いけびら き だ
す。石材は凝灰岩で、言い伝えによると上名の池平から切り出
されたものだそうです。

とうじ がいせんもん にほん かくち た げんざい
当時、凱旋門は日本の各地でたくさん建てられましたが、現在
かんぜん かたち のこ やまだ がいせんもん しずおけけん
までほぼ完全な形で残されてあるのは、山田の凱旋門と静岡県
はままつし れんがづく にほん がいせんもん
浜松市にある煉瓦造りのものだけです。ちなみに、日本の凱旋門
きげん うんどうかい た りよくもん
の起源は、運動会のときなどに建てられる緑門だといわれます。
やまだしょうがっこう いなほもん
山田小学校の稲穂門ともつながりがあるんですね。

やまだ がいせんもん ねん へいせい ねん くに
山田の凱旋門は、2001年（平成13年）8月28日に国の
とうろくゆうけいぶんかざい してい
登録有形文化財に指定されました。



秋季大運動会稲穂門

こうぶんかん 興文館

1877年（明治10年）の西南戦争の後、当時の山田村麓（麓は郷土が多く住む集落）の青年達は、学習を深めお互いを励まし合い元気づけるために、山田小学校の一室を使用したり、村の倶楽部（集会所）を借りて、毎夜勉強をしたり武道をしたりして心と体を鍛えていました。これを夜学校、または研究舎とっていました。（のちに瀬戸山良敏によって興文館と改名されました。）しかし、学校の都合によってたびたび夜学を中止することがあったり設備が不十分であったりしたために、青年達から新たな学舎（学習をするための建物）を建設したいとする要望が起こりました。

1915年（大正4年）、山田地区公民館の隣に興文館が建設されました。かたわらには記念碑が建てられています。

興文館では主に古馬場、新馬場、星ヶ山の男の子たちが学び、義士伝、曾我の傘焼、十五夜の綱引、鬼火焚きなどの行事も行



なわれ^ごました。その後、1945年(昭和20年)の終戦^{しゅうせん}まで、
興文館^{こうぶんかん}において夜学^{やがく}が行^{おこな}われ、青少年^{せいしょうねん}の学^{がく}習^{しゅう}の場^ば、話し合^{はな}い
の場^ば、心^{こころ}と体^{からだ}を鍛^{きた}える場^ばとして活^{かつ}用^{よう}されました。

さらに、戦^{せん}後^ごの興文館^{こうぶんかん}は剣道^{けんどう}を中^{ちゅう}心^{しん}として、青少^{せいしょう}年^{ねん}を健^{けん}全^{ぜん}に
育^{そだ}てるた^おめに大^{やく}きな役^{わり}割^はを果^はたしました。

こうどうしゃ 弘道舎

寺脇^{てらわき}に弘道舎^{こうどうしゃ}と名^なづけられた学^{がく}舎^{しゃ}がありました。1913年^{ねん}
(大正2年)に山田村青年会^{やまだむらせいねんかい}が文部省^{もんぶしょう}の表^{ひょう}彰^{しょう}を受^うけたこと^{こと}で、
下名北^{しもみょうほくぶ}部^ぶ(新馬場^{しんばば}・古馬場^{ふるばば}・星ヶ山^{ほしがやま})で興文館^{こうぶんかん}を建^{けん}設^{せつ}する計^{けい}画^{かく}
が進^{すす}んでいま^いました。下名南^{しもみょうなんぶ}部^ぶ(寺脇^{てらわき}、西田^{にしだ}など)の青少^{せい}年^{ねん}達^{たち}は、
興文館^{こうぶんかん}建^{けん}設^{せつ}に協^{きょう}力^{りよく}し参^{さん}加^かするこ^ことを申^{もう}し入^いれま^いした。しか^しし、
話^{はな}し合^あいはうま^まくいか^かず、下名南^{しもみょうなんぶ}部^ぶだ^だけで別^{べつ}に学^{がく}舎^{しゃ}を建^{けん}設^{せつ}
するこ^ことに^にな^なりました。弘道舎^{こうどうしゃ}は、1915年(大正4年)に建^{けん}設^{せつ}
され^され^れました。



むかし いりょう 昔の医療

いまのよう^{いま}に医療^{いりょう}が発達^{はったつ}していなかった昔^{むかし}は、ほとんどが自分^{じぶん}の家に伝わる方法^{いえ つた}でけがや病気^{ほうほう}の手当^{びょうき}をしていました^{てあて}。

例えば、草木^{たと}の根^{くさき}や葉^ね、または皮^はなどから揉み出した生の汁^{かわ}や煎^もじた^だ（煮詰めて出すこと^{なま}）ものを飲^{しる}んだり傷口^{せん}につけたりしました^{に つ}。

○熱^{ねつ}が出たとき^で …大根^{だいこん}を煎^{せん}じて飲む^の。

○蚊^か、虻^{あぶ}に刺^さされたとき …生キノコ^{なま}を女^{おんな}の人が噛^{ひと}んでつける^か。

○できもの …生大根^{なまだいこん}をつける。

○とげ抜き^ぬ …イボタノキ^{かわ}の皮^{くろや}を黒焼き^{くろや}にしてつける。

○腹痛^{ふくつう} …平たい石^{ひら}を火^{いし}で温め^ひ（温石^{あたた}）、病人^{おんじやく}の腹^{びょうにん}に当てる^{はら}。

その他^た、灸^{きゅう}（もぐさを小さくちぎり患部^{ちい}などにのせて火^{かんぶ}をつけ温める^ひ）や紅^{あたた}（血行促進^{べに}？）などが用いられました^{けっこうそくしん}。

これらの方法^{ほうほう}は実際に効果^{じっさい}があるものか^{こうか}はよく分かりません^わ。決^{けつ}してまねをせず、病院^{びょういん}に行^いって治療^{ちりょう}してください。

明治初期^{めいじしよき}になると、富山^{とやま}から売薬人^{ばいやくにん}（鹿児島^{かごしま}では「越中^{えっちゅう}どん」
と呼ばれ親しまれた。）が来るようになり、その薬^{くすり}も使われる
ようになりました。越中^{えっちゅう}どんは、月に一度^{つき}薬^{いちどくすり}がたくさん入っ
た大きな四角^{おお}い葛籠^{しかく}（箱形^{つづら}のかご）を背負^{はこがた}って来て、家庭^せに預け
てあった薬箱^{くすりばこ}の中身^{なかみ}を古いものを新しいものに取り替^{あた}えます^と。
そして、使った分の薬^{つか}の代金^{ぶん}を受け取りました^{くすり}。按摩膏薬^{あんまこうやく}（肩^{かた}
や腰^{こし}など痛むところ^{いた}にはり付ける^つ）がよく用いられたそうです^{もち}。

びょういん 山田の病院

かわまたいいん ないか かごしま かいぎょう かわまたによすい きょうり
○川俣医院（内科）…鹿児島で開業していた川俣如水が郷里に
かえ
帰ってきて、1887年（明治20年）ごろに下名の新馬場で
かいぎょう によすい かんぽうやく はんばい
開業しました。如水は漢方薬も販売していました。1933年
しょうわ しぼう へいいん かんぽうやく はんばい かでんやく
（昭和8年）に死亡したために閉院。漢方薬の販売だけは家伝薬
として子の清孝に引き継がれましたが、1950年（昭和25
年）には廃業（やめること）しました。

いいん ないか がんか かわまたいいん やっきょく つと ながさき
○鶴源医院（内科・眼科）…川俣医院の薬局に勤め、のち長崎
いがく まな な ふめい めいじ ねんたい しんばば かいぎょう
で医学を学んだ源（名は不明）が、明治20年代に新馬場で開業
のち てらわき いてん しょうわ はじ ころ へいいん
（後に寺脇に移転）。昭和の初め頃に閉院しました。

たしろいいん ないか げか たしろやたろう めいじ
○田代医院（内科・外科）…田代弥太郎が1897年（明治3
0年）ごろ、古馬場を開いた医院。引き継ぐ人はなく閉院。

たなかいいん げか おな たなか やきち みるばば ひら
○田中医院（外科）…同じころ、田中弥吉が古馬場を開きまし
しょうわ はじ へいいん やきち しょうき やたろう いっしょ かわまた
た。昭和の初めごろ閉院。弥吉は、上記の弥太郎と一緒に川俣
によすい まな かごしまし いがく へんきょう
如水に学び、のち鹿児島市で医学を勉強しました。

ありまのぶあき かんぽう めいじ いじゅういん
○有馬信明（漢方）…1887年（明治20年）ごろ、伊集院か
き かみなうちやまだ かんぽうやく はんばい きゅうめいすい
ら来て、上名内山田で漢方薬の販売をしていました。救命水、
のうしんとう とく ゆうめい とお けんがい く きゃく
脳神湯は特に有名で、遠く県外から来るお客さんもいました。

ひさながいいん ないか ながさき かがくせんもんがっこう げんざい ながさき
○久永医院（内科）…久永貞邦が長崎医学専門学校（現在の長崎
い かいがく そつぎょう きづし かいぎょう しょうわ
医科大学）を卒業し木津志で開業し、1928年（昭和3年）
しんばば いてん げんざい いんちよう まご
に新馬場に移転しました。現在の院長は孫の富士朗先生です。
げんざい やまだこうくゆいいつ びょういん くみん けんこう まも
現在、山田校区唯一の病院であり、区民の健康を守っています。

やまだ むかし まち 山田の昔の町

めいじ いちばんはじめ むかし ほんとお ぶるばば
明治になってから、一番初めに、昔の本通りである古馬場に、
もりなが ひと さかなや ひらた ひと
森永という人が魚屋をやっていました。つぎに、平田という人が
さかなや ひら mise さかな う ほか やまだ せいざん
魚屋を開きましたが、この店は魚を売る他に、山田で生産され
たけ かわ じゅひ せんい りよう つづら ぶっぴん
る竹の皮、あおぎり（樹皮の繊維を利用）、葛籠などの物品をお
かね ぶつぶつこうかん しなもの しなもの ちよくせつと か しょうばい
金または物々交換（品物と品物を直接取り替えること）で商売
していました。

めいじ ねん にっしんせんそう ころ しんまち はらぐちしょうてん
明治27年（1894年）、日清戦争の頃、新町に原口商店
かじき いじゅう めいじ ねん ねん でぐちしょうてん
（加治木から移住）ができ、明治38年（1905年）出口商店
なかがわら いてん しんまち やまだ ちゅうしんち
が中川原から移転してきました。新町は、山田の中心地であり、
こうつう べん あた ひと あつ
交通の便がよく、この辺りに人がよく集まりました。そのため、
めいじ すえごろ かごしま かじき かもう mise うつ
明治の末頃から、鹿児島や加治木、蒲生からだんだんと店が移っ
てきて、たいしょう はじ しょうてんがい こうせい
てきて、大正の初めにかけて商店街が構成されました。

めいじ すえごろ けんどう かいせつ とうじ けんどう しんばば
明治の末頃、県道が開設されると、当時の県道である新馬場に
mise あつ けんどう しないや はしや かじや mise
店が集まってきました。剣道の竹刀屋、箸屋、鍛冶屋などの店が
ありました。

しょうわ はじ なかごろ やまだむら ゆくば きたやま
昭和の初めから中頃までは、山田村の役場などがあり、北山や
きづし ひと き にぎ
木津志からも人が来ていたいへん賑やかでした。タクシー、
うんそうや りよかん けん いんしょくてん けん
トラック運送屋、旅館（3軒）、飲食店（5軒）がありました。
おおやま なん や ひらたみせ
大山には何でも屋の平田店がありました。

やまだむら しょうわ ねん ねん あいらちょう がっぺい こうつう
山田村が昭和30年（1955年）に始良町に合併し、交通が
はったつ いぜん かっき
発達したことから以前のような活気はなくなりました。

やまだ しょうこうかい ぎおんまつり 山田の商工会と祇園祭

しょうこうかい かくしょうてん けいえい もくてき つく
商工会とは、各商店の経営をよくしようという目的で作ら
れ、そうだん う しどう だんたい
相談を受けたり指導をしたりする団体のことです。

1964年（しょうわ ねん ころ やまだ こ しょうてん
昭和39年）頃、山田では30戸ほどの商店が
しょうこうかい はい たいはん しょくりょうひんてん しんまち しんばば
商工会に入っていました。大半が食料品店で、新町、新馬場
しゅうちゅう
に集中していました。

やまだ しょうこうかい くれ がつ おおう だ ほん がつ
山田の商工会では、暮（12月）の大売り出し、盆（8月）
ぎおんまつり おこな かくしょうてん しんぼく はか もくてき
の祇園祭を行っていました。また、各商店の親睦を図る目的
あき やきゅう おこな ぎょうじ
で秋にスポーツ（野球など）を行っていました。こうした行事
いぜん さか
は以前はたいへん盛んでした。

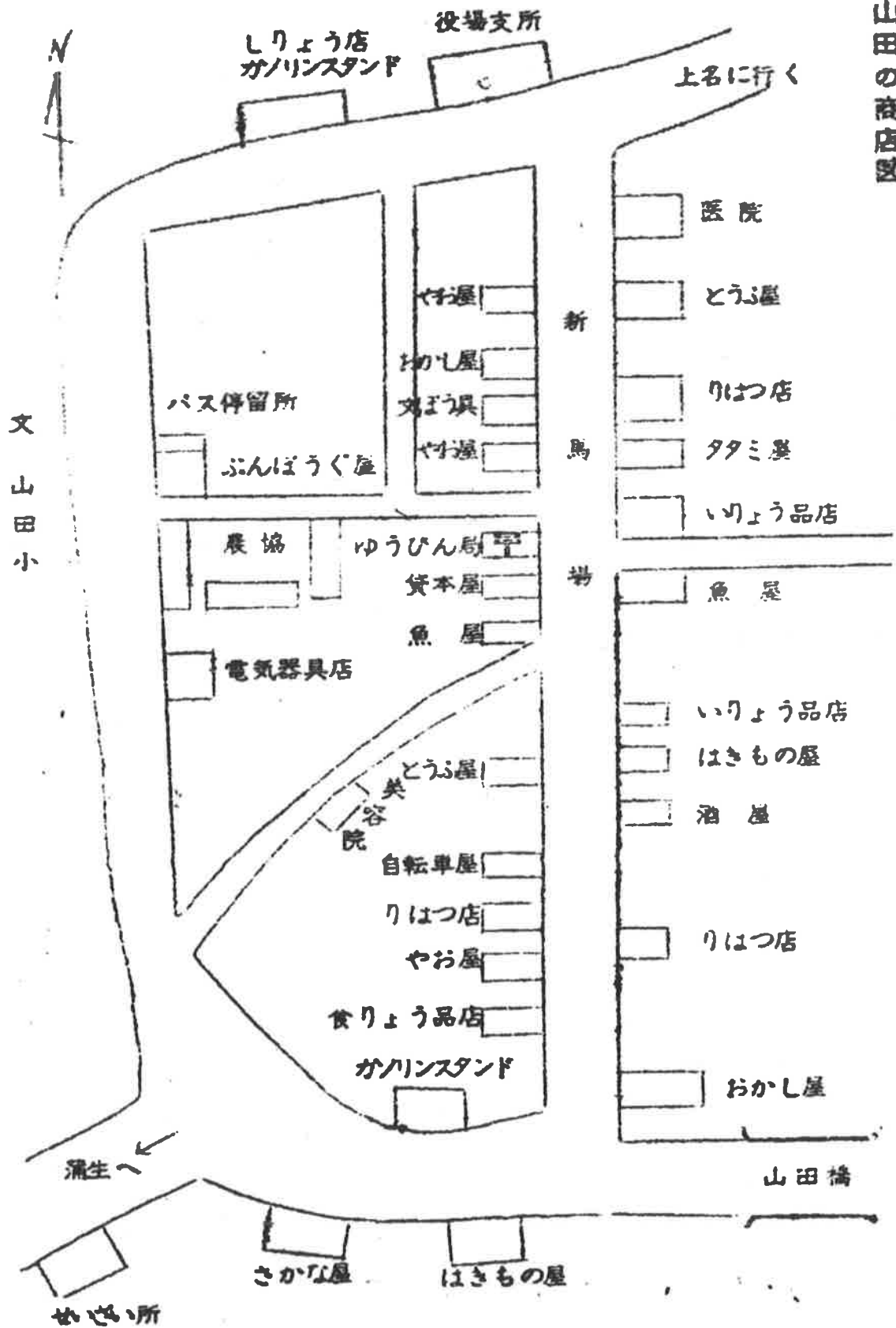
ぎおんさあ やさかじんじゃ しょうばいはんじょう かみさま やまだ
お祇園様（八坂神社）は、商売繁盛の神様です。山田では、
ほん おぎおんさあとしてにぎ やかなまつ みこし だ
お盆におぎおんさあとして賑やかなお祭りをして、お神輿を出
して行きました。（しょうわ ねん しんまち みずぐち きねん ひ まえ
昭和31年、新町の水口ゆきえ記念碑の前に
やさかじんじゃ あいらちょう がっぺい
八坂神社をまつたとあります。）この祭りは、始良町に合併し
あと ちょうそん ちょうさ しげとみ やまだ おこな
た後は3カ町村（帖佐・重富・山田）で行うようになりました。



写真は新馬場通り

やまだ しょうてんがい ねん
山田の商店街(1964年)

山田の商店街

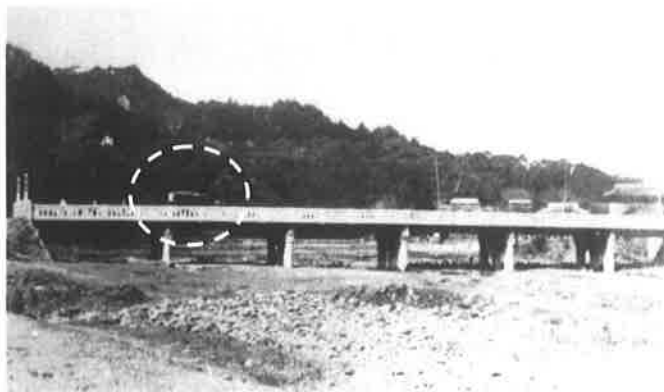


きゃくばしや 客馬車

1907年（明治40年）、水明旅館の吉水市蔵という人が
山田で最初の客馬車を始めました。

この3年前、山田から重富駅に通じる県道が開かれていたの
で、客馬車も1日2回、重富駅まで行っていました。1926
年（大正15年）に帖佐駅ができると、客馬車も帖佐駅まで行
きました。発車10分前になると、山田橋の上で合図の笛を吹い
て乗客に知らせていたそうです。

明治時代の末頃から大正時代にかけて、山田は山田村の
中心地として、役場やその他の官公署がありました。そのため、
あちこちから役人や村人などが山田に出てきて用事を済ませる
ので、町も栄えていました。旅館も水明、相星、知覧、楠と
4軒もあって、駅へ送る客も多くいました。吉水の他にも客
馬車の営業をする人たちも出てきましたが、昭和の初め頃にな
り乗り合いバスが登場すると、客馬車に乗る人はいなくなっ
てしまいました。



（左）山田橋上を客馬車が通りすぎるところ



（右）客馬車

やまだばし 山田橋

やまだばし
山田橋は、1929年（昭和4年）に完成した長さ60.5
はば
m、幅5.8m、6連の鉄筋コンクリート製の橋です。

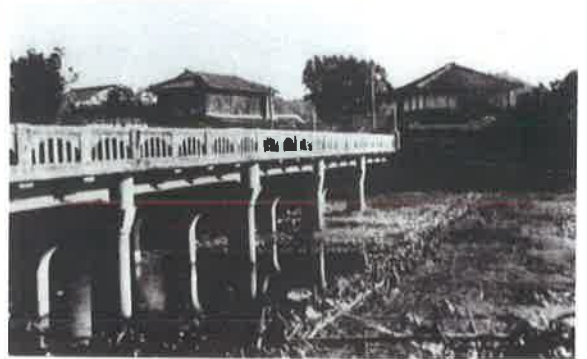
やまだばし かんせんどうろ すいがい なが しょうぶ はし
山田橋は、幹線道路にあったために、水害で流れない丈夫な橋
をつくって欲しいとの地元の思いがあり、県議会議員であった
せとやまよしとし ちから けんせつ じつげん けんせつ ちょうさ
瀬戸山良敏が力をつくし、建設が実現しました。建設には帖佐
まつばら でかせ じよせいろどうしや おおぜい にぎ
松原から出稼ぎの女性労働者などが大勢きて賑わったそうです。

とうじ さいこう ぎじゆつ けんせつ やまだばし すく
当時の最高の技術で建設された山田橋は、デザインにも優れ
くふう おやばしら こうらん けいじょう
た工夫がなされ、親柱や高欄にみられるアーチ形状のデザイ
ンは、山田凱旋門を思わせます。橋のたもとに水明館など数軒の
りよかん あた にぎ やまだばし きょうとう よる
旅館があり、辺りも賑わっていました。山田橋の橋灯には夜に
なると電燈が灯り、行き交う人々を照らしていたそうです。ま
た、戦時中はアメリカ軍の爆撃を受けたこともありました。山田
しょうがっこう うんどうかい くみたいそう やまだばし ひょうげん
小学校の運動会では、組体操で山田橋を表現したブリッジを
していたそうです。

ちいき く はってん おお そんざい つづ
地域の暮らしと発展になくなくてはならない大きな存在であり続
けてきた山田橋は、山田の誇れる価値の高い地域資産です。



写真は山田橋（左 2016 年・右 1940 年）



山田旅館（楠木）と水明館（吉水）

たいへいようせんそう やまだ 太平洋戦争と山田

1945年（昭和20年）7月27日、山田はアメリカ軍の飛行機により空襲を受けました。アメリカ軍の飛行機は、爆弾と焼夷弾（家々を焼き払う爆弾の一種）を山田橋付近に落としました。そのため、焼夷弾が落ちた水明館旅館が全焼しました。また、爆弾が山田橋近くのキャンディー屋を直撃しました。

戦争は子どもたちの暮らしや学校にも深い影響を与えました。山田小学校（当時は山田国民学校）の校庭には防空壕が掘られていました。また、食料が不足していたため校庭は畑になっており、サツマイモや南瓜が植えられていました。

校舎は空襲でねらわれる恐れがあり危険なため、山に入って木々の間を教室がわりに勉強をしました。モールス信号や手旗信号を習ったり初歩の軍事教練をしたりという戦争に関係する内容が増え、学校園や実習地での畑仕事や縄をなうなどの作業も多くなりました。

山田川が大きく曲がり淵になっているところを小城淵と言いますが、そこに軍艦島を造り海洋少年団の訓練場としました。子どもたちは、そこで水泳をしたり川崖をよじ登ったりして身体を鍛えた他、手旗信号など海軍の基礎訓練をしました。

アメリカ軍の上陸が予想されたため、離島の種子島などから「学童集団疎開」といって本土に避難してきた子どもたちがいました。山田では島間国民学校の子どもたちを受け入れました。

やまだちゅうがっこう 山田中学校

たいへいようせんそう
太平洋戦争に敗れたことにより、にほん日本はこくぐんさいこうしらいかん連合軍最高司令官
そうしらいぶ せんりょうか
総司令部の占領下であって、せんごかいかく いっかん戦後改革の一環としてきょういくかてい教育課程の
だいきほ かいへん おこな
大規模な改編が行われることになりました（がくせいがいかく学制改革）。

そして、1947年（昭和22年）からは、ぎむきょういく義務教育は、9
ねん年（6・3制）となり、ぜんこくてき しんせいちゅうがっこう ほっそく全国的に新制中学校が発足しました。

やまだちゅうがっこう山田中学校は、1947年4月1日にねん がつ にち設立が認められ、同年
どうねん5月2日に初めての入学式が行われました。しかし、あまり
がくにも急なことで、はじ にゅうがくしき おこな校舎の建設が間に合わず、きゅう山田小学校の講堂
こうしゃ けんせつ ま あ やまだしょうがっこう こうどうを6つに区切り教室とし、こうどう ひか しつ しょくいんしつ講堂の控え室を職員室としました。
がっきゅうへんせい せいとすう しょくいん めい しゅっぱつ6学級編成、生徒数275人、職員11名での出発でした。
やまだちゅうがっこう こうしゃ らくせい いてん よくとし がつ にち山田中学校の校舎が落成し、移転したのは翌年の2月25日の
ことです。

こうか せいてい校歌が制定されたのは1957年（昭和32年）です。



かどまつ 門松

いま しょうがつ かざ もの おも もともと としがみ
 今は正月の飾り物のように思われていますが、元々は歳神の
 よりしろ しんれい いっしゅ た き ちほう
 依代（神霊のよりつくもの）の一種です。立てられる木は地方に
 よって違いがあり、 ちが かなら まつ かぎ くろしまじんじゃ
 必ずしも松とは限りません。黒島神社の
 かどまつ つか こだい しんせい き
 門松にはカシ（榿）が使われています。カシは古代から神聖な木
 であり、 じょうぶで 堅いことがめでたいとされました。
 としがみ としと よる いえいえ おとす あたら いのち あた
 歳神とは、年取りの夜に家々を訪れ新しい命を与えてくれ
 かみさま
 る神様のことです。



下名古馬場
 松、葉のついた竹、ユズ
 リハ、ナンテン



大山日枝神社
 松、竹、サカキ



山田凱旋門
 松、竹、笹、ナンテン、
 ユズリハ、葉ボタン

うえ しゃしん かどまつ さまざま ようしき わ
 上の写真のように、門松には様々な様式があることが分かりま
 すが、 まつ たけ きょうつう まつ かみ やど き
 松と竹、ユズリハは共通します。松は神の宿る木とされ
 かみ ま まつ わ か よ にほんじん
 （神を待つ、祀る）、和歌にもよく詠まれるように日本人にと

^{した} ^{ふか} ^{しょくぶつ} ^{たけ} ^{てん} ^さ ^ま ^す ^の
 って親しみの深い植物です。竹は天を指して真っ直ぐに伸びる
^{すがた} ^{あた} ^ら ^は ^で ^{ふる} ^は ^お
 姿のよさ、ユズリハは、新しい葉が出てから古い葉が落ちる
^{しんきゅうそう} ^{えんぎ} ^{いわ} ^{かざ}
 ので、新旧相ゆずるという縁起を祝って飾られます。



^{うえ} ^{しゃしん} ^{ちらん} ^{ひだり} ^{たねがしま} ^{みぎ} ^{かどまつ} ^{かどぎ}
 さて、上の写真は知覧（左）と種子島（右）の門松（門木）
^{ちらん} ^{えんすいじょう} ^も ^{まつ} ^は
 です。知覧のものは、円錐状に盛ったシラスに、松、葉のつい
^{たけ} ^た ^{まき} ^{ほんえんすいじょう} ^お
 たままの竹、ユズリハを立て、シラスには薪を3本円錐状に置
^{たねがしま} ^も ^{まさご} ^{まつ} ^は
 きます。種子島では、盛った真砂にマテバシイ、松、葉のつい
^{たけ} ^た ^{ねもと} ^{わりき} ^{まき} ^{かこ}
 たままの竹、ユズリハを立て、根元を割木（薪）で囲みます。

^{やまだ} ^{ふる} ^{かたち} ^{かどまつ} ^た
 おそらく、山田でも古くはこのような形で門松が立てられて
^{あいらちようきょうとし} ^{つき} ^{きじゅつ}
 いたのではないのでしょうか。始良町郷土誌には次のような記述
 があります。

^{おおみそか} ^{もん} ^{りょうがわ} ^も ^{だけ} ^た ^{しめなわ}
 大晦日に門の両側にシラスを盛り、コサン竹を立て注連縄を
^は ^{しめなわ} ^{あた} ^{つく} ^{ちゅうおう}
 張る。注連縄は新しいわらで作り、中央にダイダイ、ウラジ
^{もくたん} ^{むす} ^{もん} ^{げんかん}
 ロ、木炭、ユズリハを結びつけた。そして、門から玄関までシ
^{きぶん} ^{しんねん} ^{むか}
 ラスをまきすがすがしい気分新年を迎えた。

おにびた 鬼火焚き

おにびた しょうがつなのか ひ た おこな まつ きゅうしゅうちほう
鬼火焚きは、正月7日に火を焚いて行う祭りで、九州地方
ひろ おこな しょうがつ にち きゅうちゅう ひ た まつ
で広く行われています。正月15日に、宮中で火を焚いて祭
りをするのは、へいあんじだい きろく みんなん ひろ
りをするのは、平安時代の記録に見えますが、これが民間に広
まったものです。ぜんこくてき おこな ぎょうじ ちほう
まいたものです。全国的に行われる行事ですが、地方によって
さぎちょう や まつ よ かた ちが
左義長、どんど焼きなど祭りの呼び方に違いがあります。

山田では、12月中旬頃に山から太い孟宗竹を切り出して、
た ほねぐ つく せんたん は のこ
田んぼにやぐらの骨組みを作ります。このとき先端に葉を残し
た おお たけ ちゅうしん た ほそ たけ たば
た大きな竹を中心に立てます。そして、細い竹を束にしたもの
でやぐらを かこ なわ こてい なのかよる こ ぼごしゃ
でやぐらを囲み縄で固定します。7日夜に子どもたちや保護者、
ちいき ひとびと あつ やくどし としおとことしおんな てんか
地域の人々が集まり、厄年や年男年女によって点火がされま
す。しょうがつ かどまつ しめなわ いっしょ も も
す。正月の門松や注連縄なども一緒に燃やします。その燃える
ひ さいなん おに ちから からだ もち
火には災難（鬼）をはらう力があるとされ、体をあぶったり餅
や た た ねん むびょうそくさい ねが
を焼いて食べたりすることで1年の無病息災を願います。また、
たけ は おと あくまよ
竹の爆ぜる音は悪魔除けになるとされます。

こうした大切な故郷の行事が失われていくことは残念です。
たいせつ ふるさと ぎょうじ うしな ざんねん



ななくさぞうすい なのかずし 七草雑炊(七日草粥)

7才になった子どもが、七草雑炊を、7軒の家からもらいお祝いとします。これはその子どもにふりかかった災難が、7軒に分けられて軽くなるためだそうです。また、雑炊の灰汁を取り、7才児の爪に塗ると、厄を払うと言い伝えられています。

山田では、ずしをもらいに行く家が橋を渡って行くところには行ってはならないとされていたそうです。(始良町郷土誌)

古代より日本では、年初に雪の間から芽を出した草を摘む「若菜摘み」という風習がありました。また、中国には、旧暦1月7日に、7種類の野菜を入れた羹(とろみのある汁物)を食べて無病を祈る習慣がありました。これが日本の習俗と合わさって七草粥になったと考えられています。

雑炊の材料となる7種の野菜には諸説あり、地方によって違いもあります。

○雑炊の材料(例)

せり、にんじん、ごぼう、だいこん、もやし、さといも、こんぶ、こめ、もち



3がつせっく はる ひが 3月節供, 春の彼岸

3月は農業の上での重要な季節とされ、物忌み（神を迎えるために行いなどを慎むこと）や禊ぎ（水の力によって心身をきれいにすること）を行いました。これは、中国の古い習俗が日本に伝わったものと考えられています。

この頃に磯遊びとって海辺に出かけ潮干狩りや飲食をする習俗は日本全国にあります。また、野遊びや山遊びなどといって野外に出かけ、終日を遊び暮らすところも多いです。つまり、この日は家にいて仕事をしてはいけない神事の日です。日本の多くの学校で春に遠足を行うのも、この名残です。

3月の節供（3月3日）は桃の節句ともいい、女の子のためにご馳走を作り、雛人形を飾ってお祝いをします。もとは人の形をした形代（身代わり）に罪穢れを移して川に流したものが始まりで、紙や草で作った人形を手作りし、節供がすむと川や海に流していました。毎年飾った後に大切にしまっておくような立派なものが一般に広まったのは明治時代以降だそうです。



昔は女の子が生まれると、3月の節供に親類などが人形を贈り、その家では人を招いてお祝いをするものでした。高麗餅（小豆あんに砂糖、米粉を混ぜて蒸しあげる）、煎粉餅（もち米を煎って砂糖蜜で練り蒸しあげる）、よもぎ餅、小豆羹などを作りました。



高麗餅



煎粉餅



小豆羹

同じ日、農家では、牛馬の正月であるとして、牛馬に餅を食べさせ年をとらせました。

春の彼岸は、春分を「中日」とし、その前後各3日間を合わせた7日間です。日本独自の仏教行事で、806年（大同元年）に初めて行われたという記録があります。「彼岸の中日」には、祖先を敬い亡くなった人を偲んで、お墓参りなどをします。この日は、殺生（生き物を殺すこと）をしてはならないとされます。

お供え物として、ぼた餅（炊いた米を軽くついてまとめ、厚く餡で包む）を作ります。



やまだがわあゆ いしや 山田川鮎の石焼き

(アイノイオのやっみそ)

江戸時代(1843年)に出版された三国名勝図会という本に、山田の産物として有名なものは茯苓、瓜呂実、桔梗、柴胡、前胡(漢方薬の材料)、香魚(鮎)、すっぽんと書かれています。

また、こんな言い伝えがあります。ある年の6月29日、帖佐の領主であった平山氏が鮎の名所山田川原で宴を楽しんでいるところへ、蒲生八幡の夏越祭の手伝いから帰る途中の国分正八幡宮の神官たちが通りかかりました。かねてから仲の悪い相手なので、平山氏の家来達は神官達を馬から引きずり下ろしさんざん乱暴をしました。これが、原因で大きな戦が起こったということです。おそらく室町時代初めの頃だと思われます。

さて、山田川鮎の石焼きの作り方ですが、まず河原の石を焼きます(2時間以上)。その上に鮎をのせて焼き、身をほぐします。そこへ、次々に野菜(胡瓜、茄子、といもがら、玉葱、人参など)を入れ、味噌と砂糖を加え混ぜ合わせます。最後にしその葉を入れて出来上がりです。野趣あふれる鮎の石焼きは、昔から人々に愛されてきたふるさと山田の味なのです。



お 盆

お盆は、旧暦7月15日を中心に、百味の飲食（様々な料理）を供え、祖先父母の霊を供養する行事です。仏教の盂蘭盆からきているとされます。宗派や地域によって作法や料理に違いがあります。

13日の精霊迎えから16日の精霊送りまでを期間とするのが普通であり、この間に盆棚という特別の棚を設けて精霊を祀ります。また、家の祖先の他に、身寄りのない霊（外んこさあ）などを別に祀ることもおこなわれます。

精霊迎えは、盆の精霊を家に迎える行事で、精霊を墓に迎えに行きます。迎え火を焚いたり提灯を下げたりします。

盆料理

お盆の間は、盆料理で精霊をもてなします。今では、このようなしきたり（慣習）を続けている家は少なくなりました。

13日夜

○特に料理なし。お茶と茶菓子くらい。酒（だれやめ）

14日朝（ご飯の他に）

○呉汁 大豆、茄子、みがしき、牛蒡、南瓜、昆布、揚げ豆腐、こんにゃく

○油炒め 苦瓜、といもがら、豆腐

○酢の物 といもがら、大根（焼き茄子の時もある）

14日昼

○おはぎ (団子^{だんご}のところもある)

○白和え しろあ とうふ なつやさい なす きゅうり
豆腐, 夏野菜, 茄子, 胡瓜,

14日夜

○ご飯, 汁 ^{はん} ^{しる}

○煮^にめ ^{しめ} こんにやく, 牛蒡^{ごぼう}, 高野豆腐^{こうやとうふ}, 揚げ豆腐^{あ とうふ}

○煮豆 ^{にまめ} 大豆^{だいず}の新しいもの ^{あたら}

15日朝

○赤飯, 呉汁 ^{せきはん} ^{ごじる}

○刺身, こんにやく, 揚げ豆腐 ^{さしみ} ^{あ とうふ}

15日昼

○冷やそうめん ^{ひや}

15日3時茶 ^{ちや}

○油炒め ^{あぶらいた} 野菜^{やさい}, 豆腐^{とうふ}

15日夜

○白だんご, 小豆あん ^{しろ} ^{あずき}

15日十時茶 ^{ちや}

○だんご, そうめん2~3本 (土産) ^{ほん} ^{みやげ}

16日朝

○汁粉 ^{しるこ} 旅立ち ^{たびだ}

じゅうごや つなひ すもう 十五夜・綱引き・相撲

きゅうれき がつ にち にわ うす だ うえ み
旧暦8月15日、庭に臼を出し、その上に箕をのせ、すす
き・はぎ・くり・しおんなどをびんにさし、ますにもちまた だんご
15個盛って供えます。また、秋の果物や里芋を茹でたものな
どをそな つき で ま いえじゅう もの つきみ
供えて月の出を待ち、家中の者がそろって月見をします。

じゅうごや つなひ すもう みなみきゅうしゅうちほう
十五夜に綱引きや相撲などをするのは、南九州地方だけ
でんとうぎょうじ いぜん やまだ ふるばば しんばば しんまち ほしがやま
の伝統行事です。以前は山田（古馬場・新馬場・新町・星ヶ山）
でも、しんばばどお おおつなひ おこな おお ひとひと さんか
新馬場通りで大綱引きが行われ、多くの人々が参加し
にぎわ つなね せいしやうねん あつ こうぶんかん しんばば
て賑いました。綱練りは、青少年が集まり、興文館（新馬場
こうみんかん まえにわ おこな そうり つく
公民館）の前庭で行いました。また、このとき大きな草履が作
られこうぶんかん そば たいぼく か
興文館の側の大木に掛けられたそうです（こんなに大きな
ひと あくま おど むら い まじな
人がいるのだと悪魔を威し、村に入れなかったための呪い）。



やまだ さと 山田の里かかしまつり

1994年(平成6年), 山田郵便局の前に数体のかかしが
立てられました。これは、当時局長をされていた米田弘さん
が「過疎の進む地域を何とか元気にしたい。」という思いから
局員や農協に呼びかけ、制作されたものでした。

それから2年後には、自治会、婦人会、各種団体等の協力を
得て実行委員会が作られ、かかし作りは地域としての行事に変
わりました。かかしの展示に加えて、山田地区公民館を会場に、
地域の農産物を中心としたバザーや草花苗の無料配布も行わ
れました。

1998年(平成10年)には、「地域全体で参加するまつり」
を目指して、山田校区社協が福祉活動の一環として呼びかける
形で、自治会、小・中学校、各種団体による実行委員会が組織
されました。小・中学校の子どもたちが作文と図画を応募す
るようになったのはこの年からです。

イベント会場が山田小学校に移り、現在のような形で行
われるようになったのは、2004年(平成16年)のことです。



た かみ 田 の 神

田を見渡せるあぜなどに石像を置き、米がよくなるように祭ります。また、小型の石像を一年交替で郷中の各家でまわしたり、自分の家一軒で石像を持っていたりします。

郷中の「まわり田の神」は、旧暦十月亥の日の「田の神講」で次の家にゆずり渡されています。その時、田の神の顔に真っ白く白粉でお化粧をします。

田の神は、盗んでもよいとされています。山田でも盗んでいて自分の所の米がよくなったら、米一俵つけて元の所へ返すという風習があったそうです。

日本は稲作を主とする農耕社会であったので、田の神を祭る習俗は大昔より年中行事の中心に置かれ、今日まで大切に伝承されてきました。ただし、地方によって神さまの姿やいわれ、行事の作法などに大きな違いがあります。鹿児島のような石像をつくって祭るのは、南九州だけの独特の習俗です。



中川原の田の神



内山田の田の神



大山東の田の神

こう 講について

こう講は、あるものをまつひ祭る日として、かくしゅうらくごうじゅうはん各集落の郷中（班）ごとに受け継がれてきたぎょうじげんざいしょうめつ行事です。現在では消滅してしまっただものがほとんどで、かつての様子を知る人も数少なくなっています。

(1) てんじんこう 天神講

がくもんかみさまてんじんこうすがわらのみちざねまつひ
学問の神様としての天神公（菅原道真）をお祭りする日です。

きゅうれきしょうがつねんかいき
旧暦の正月、5月、9月の年3回が決められていましたが、
しょうわねんいこうねんせいにゅうがくいわそつぎょう
昭和21年以降は、4月（1年生入学祝い）、10月、3月（卒業
いわかいへんこう
祝い）の3回に変更されました。

てんじんこうはじごころわえどじだい
天神講の始まりがいつ頃なのかは分かりませんが、江戸時代
なかごころかんが
の中頃ではないかと考えられます。

むかしさいいかおとここざもとせわやくいえあつ
昔は、14才以下の男の子たちが座元（世話役）の家に集ま
り、いえとこまてんじんこうしょうそうがかうつわかか
り、家の床の間に天神公の肖像画または書き写した和歌の掛け
じくがくもんじょうたついのあとざもとじゅんびたものいん
軸に学問の上達を祈った後、座元が準備してくれた食べ物を飲
しよく
食するものでした。

しょうわねんいこうしょうがくりんばんざもと
昭和21年以降は、小学6年生（12才）が輪番で座元とな
り、こめもよつくたあとあそ
り、米を持ち寄り鶏飯など作って食べた後、みんなで遊んでい
たそうです。

おとここかしこそだしょうがつてんじんこうか
ちなみに、男の子が賢く育つようと正月に天神公の掛け
じくかざふうしゅうげんざいほくりくちほう
軸を飾る風習は、（現在では）北陸地方だけにあるそうです。

(2)女子講

霧島市の石体神社の神様に赤ちゃんが無事に産まれますようにと祈願することがもとになっている祭りです。

この講の目的は、安産祈願とともに、農家の女性たちが一年の苦労を癒し親睦を図ることでした。

明治から大正にかけては、年2回行われていましたが、昭和になり1回だけ行われるようになりました。

参加できるのは女性（女子）だけで、男子の参加は禁じられ、女子講の日は家の留守番役をすることになっていました。

期日の決定は、「婦人の集い十二日祭りの日」に協議し、10月末から11月にかけて適当な日を決めていました。

座元（世話役）は輪番制で決め、飲食の準備は座元で行われます。妊婦さんの代表が石体神社に参拝し、帰り次第、祭りの宴が開かれます。三味線や太鼓まで登場し賑やかに行われていたそうです。

※石体神社に参拝した妊婦さんは、境内にある玉石（カ石）を持ち帰り、無事にお産がすむと返納する習わしがあります。



(3) 田の神講

旧曆の10月亥の日に五穀豊穰（米などがたくさん穫れること）を祈って行われる行事です。

米1升、小豆（湯呑茶碗1杯）と酒代を座元の家を持ち寄り、餅つきを始めます。最初に、「牛の舌」といわれる形の餅を2つ作り、残りは小豆と一緒につきます。座元では、それですいた餅とり粉を田の神様の額に塗り、眉は墨できれいに化粧を仕上げ、床の間に牛の舌餅と一緒に飾っておきます。また、座元では鰯のほし魚とすり大根の用意をしておき、宴が始まる前に田の神様に礼拝し飲食します。飲食がすむと、田の神踊りが始まる習わしでしたが、今は行われていません。祭りがすみ次第、二人の男子で来年の座元の家へ田の神様と1尺5寸くらいの長さの竹筒を送り届けます。竹筒の中には、座元の名簿とその時のきまりが記入されたものが入っています。郷中によっては、田の神を座元が迎えに行き1年間預かる所もありました。田の神講の料理は、餅と和え物がつきものですが、鶴田ではドジョウをとって和え物にしていました。



写真は「大山の田の神」1782年（元明元年）建立

(4) 庚申講

十干と十二支を組み合わせてできる60の数で、年や日を表す方法を十干十二支または干支といいます。例えば、2014年は甲午（きのえうま）の年に当たります。

十干 じっかん	甲 きのえ	乙 きのと	丙 ひのえ	丁 ひのと	戊 つちのえ	己 つちのと	庚 かのえ	辛 かのと	壬 みずのえ	癸 みずのと		
十二支 じゅうにし	子 ね	丑 うし	寅 とら	卯 う	辰 たつ	巳 み	午 うま	未 ひつじ	申 さる	酉 とり	戌 いぬ	亥 い

このうち庚申の夜には、中国より渡来した信仰で、「三尸」という虫が睡眠中に身体から抜け出て、天帝（神）にその人の日頃の悪い行いを報告するので寿命が縮むと信じられていました。そのため、庚申の夜は眠らずに語り明かし、三尸が天に上るのを妨げるというのが「庚申待」という行事で、貴族社会で行われていたものが、室町時代には民間に広まり庚申講ができました。（庚申の日は60日毎なので、原則年6回行われる）

また、猿を神の使いとする信仰（山王権現・日枝神社）との結びつきもあり、申の神様をお祭りする日とされました。

山田では、明治3年の廃仏毀釈で庚申講の画像も取り上げられ一時禁止されましたが、明治中期に復活しました。古くは、正月・5月・9月の年3回、昭和22年以降は年1回行われるようになりました。

黒島神社には「庚申供養塔」（1814年8月寄進）があります。庚申供養塔とは、庚申講が盛んに行われることを祝い、講の人々の長寿を祈って建てられた記念碑のことです。

ちなみに前回の庚申は1980年、次回は2040年です。

山田の歴史年表

時代	年号	出来事
縄文時代 弥生時代		○黒瀬，城，奈良袂のあたりに人が住み着いた。 ○米作りが始まり，村ができた。
奈良時代	708 713 714 720 723	○鈴木四郎政良が黒島神社を建て，上名黒瀬に邸を構えた。 ○大隅国がつくられ，大和朝廷の支配が強まった。 ○大分から豊留，山田，蒲生あたりに200人の人を移した。 ○隼人が大きな反乱を起こし，1年半後に鎮圧された。 ○三世一身法 → 墾田永年私財法（743）
平安時代	1150頃 1179	○鎮西八郎為朝（源為朝）が上名に玉城山などを築いた。（伝説） ○源氏と平氏が争った。 ○平清盛が政権を握り，平氏が九州を支配した。
鎌倉時代	1185 1274 1276 1282	○鎌倉幕府が成立した。 ○元の軍勢が博多を攻めた。（元寇文永の役） ○山田は帖佐郡にふくまれ大隅正八幡宮の領地であった。 元軍を防ぐため博多に石の防塁を造るよう命じられた。 ○京都石清水八幡宮より平山了清が一族・家来870人余りを連れて帖佐へ移り住み，平山城を築いて山田を含む帖佐地方の領主となった。
南北朝時代 室町時代 戦国時代	1350頃 1454 1529 1543 1555 1577	○大隅八幡宮と平山氏との間に争いがあった。 ○島津季久が平山氏を滅ぼし，帖佐・山田の領主になった。 ○この頃，陽春院ができた。 ○島津氏が一族同士や他の領主と激しく戦った。 ○祁答院重武が帖佐平山城・山田城を攻め落とし，山田城主川越民部左衛門重博は討ち死にした。 ○この頃，正田院ができた。 ○種子島に鉄砲が伝わる。 ○島津氏が祁答院氏を破り，帖佐平山城・山田城を取り戻した。 ○島津氏が薩摩・大隅・日向の三州を統一した。
安土・桃山時代	1592 1600	○梅北国兼が佐敷城で豊臣秀吉に反乱を起こし，殺害された。 ○関ヶ原の戦い

時 代	年 号	出 来 事
江戸時代	1603	○江戸幕府が成立した。 ○この頃、来福寺が建てられた。
	1752	○中津野用水路ができた。
	1780	○この頃上名の新開や開、中川原に串木野から人夫(土木技術者)をやとって開田が盛んに行われた。 ○この頃、西田に米屋、麴屋、油屋など6軒ほどの店ができた。
	1815	○西田の田の神がたてられた。
	1863	○イギリスの軍艦が錦江湾に来て、薩英戦争がおきた。
	明治時代	1868
1869		○寺や仏像がこわされた。(廃仏毀釈)
1876		○山田小学校ができた。
1877		○西南戦争がおき、山田からも多くの人に従軍した。鹿児島へ帰る途中の西郷隆盛が山田に立ち寄った。(腰掛け石)
1888		○竹下六郎が山田村の初代村長になった。
1892		○光楽寺ができた。
1894		○日清戦争がおきた。 ○この頃から新町に商店ができはじめた。
1904		○日露戦争がおきた。
1906		○山田凱旋門ができた。
1907		○水明旅館の吉水市蔵が駅馬車を始めた。
1908		○山田郵便局ができた。
大正時代	1912	○山田に商店街ができ、町がにぎやかになった。
	1915	○興文館、弘道舎ができた。
	1916	○新馬場・古馬場・星ヶ山・新町に電燈がついた。
昭和時代	1928	○久永医院が新馬場にできた。
	1929	○山田橋ができた。
	1930	○山田小学校が今の場所に移った。
	1941	○山田国民学校と名前が変わった。太平洋戦争が始まった。
	1945	○山田がアメリカ軍の空襲を受けた。日本が戦争に敗れた。
	1956	○山田村、帖佐町、重富村が合併して始良町となった。
1966	○飛野分校が統合され、スクールバスが運行された。	
平成時代	2010	○始良町、加治木町、蒲生町が合併し、始良市となった。



参考文献

- | | | | |
|-------------|-------------------------|---|-------|
| 『やまだ』 | 山田小学校研究部 | 編 | 1962年 |
| 『始良町郷土誌』 | 始良町郷土誌改訂編さん委員会 | 編 | 1995年 |
| 『鹿児島の手踊り』 | 下野敏見 | 著 | 2009年 |
| 『十五夜綱引きの研究』 | 小野十朗 | 著 | 1972年 |
| 『民俗探訪辞典』 | 大島暁雄・佐藤良博・松崎憲三・宮内正勝・宮田登 | 著 | 1983年 |
| 『民俗学事典』 | 民俗学研究所 | 編 | 1951年 |
| 『鹿児島県の歴史』 | 原口泉・永山修一・日隈正守・松尾千歳・皆村武一 | 著 | 1999年 |

始良市山田の歴史，民俗，芸能，暮らし

山田研究 地域文化の記録

2015年11月11日 発行

著作者 西田哲郎

発行 始良市立山田小学校